

— 府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池）に伴う —

# 男里遺跡発掘調査概要・I

— 泉南市男里所在 —

1997.4

大阪府教育委員会



## は し が き

泉南市は、関西国際空港の開港に伴い、大阪府下でも最も活気のある地域の一つと言えます。また、泉州地域の各市町村を見渡しても、近年開発などの事業が飛躍的に増大しており、それに伴い地域全体が日々変化し続けているといっても過言ではないでしょう。その一方で、近年それに伴う発掘調査が急増し、ここ泉州地域における歴史の一端が明らかにされつつあります。

過去における男里遺跡の調査では、弥生時代や中世の集落などが確認されており、泉州でも屈指の複合遺跡と言えます。とりわけ、弥生時代中期においては拠点集落として、周辺地域の代表的な集落であったことがわかっています。しかし、これまでそれに前後する時代の様相は具体的にはわかっていませんでした。

今回の調査では、弥生時代終末から古墳時代初頭と飛鳥時代から奈良時代の河道が検出され、そこから多くの遺物が見つかりました。これらの時代の遺構及び遺物は泉州地域では調査例が少なく、男里遺跡の動態のみならず、泉州地域一帯の歴史究明に欠かせぬ資料となることでしょう。調査の全貌は後日に期するものとして、調査成果の一部を概要としてとりまとめました。ご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にあたり地元関係者をはじめ多くの方々にご協力頂きました。深く感謝いたしますとともに、今後とも文化財保護行政にご理解、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成9年4月

大阪府教育委員会

文化財保護課長 鹿野 一美

## 例 言

1. 本書は大阪府教育委員会が大阪府農林水産部より依頼を受け、平成7年度に実施した、泉南市男里所在、男里遺跡の府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池改修工事）に伴う第1次発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は文化財保護課技師有井宏子・泉南市教育委員会社会教育課文化財保護係河田泰之を担当者とし、平成8年1月8日に着手し、平成8年3月31日に終了した。
3. 調査の実施に際して地元関係者及び大阪府泉州耕地事務所、泉南市教育委員会より多大なご協力を賜った。深く感謝の意を表します。
4. 本書の執筆は河田が行った。また、遺物図版のうち、木製品の写真撮影は出合明氏が行い、その他は岡田直樹、岡一彦、廣岡一光の援助を受け河田が行った。写真図版のレイアウトは岡田直樹、岡一彦、城野博文が行った。遺物の実測は横井佐絵子、江尻美代子、大多和恵、河村公美子が行い、トレースは大多和が行った。

調査ならびに遺物の整理にあたっては以下の方々からご指導、ご教示を賜った。記して感謝いたします。

広瀬和雄、芝野圭之助、上林史郎、森屋直樹、山田隆一、土井孝之

5. 調査、整理に際し収集作成した資料は大阪府教育委員会文化財保護課にて保管している。広く活用されたい。

## 凡 例

1. 遺跡の遺構全体図は1/100である。遺物の出土状況は、1/40とし一部1/20のものもある。
2. 遺構実測図の基準高は、東京湾平均海水位（T.P.）十で表記している。
3. 遺構全体図及び遺物出土状況平面図には国土座標VI系に基づく、X、Y座標を表記しており、図面の方位は座標北を示す。
4. 図示している遺物の縮尺は、木製品は1/4・1/8とし、そのほかの遺物は1/3とした。また須恵器の断面は黒塗りにし、その他は白抜きとした。また木製品の断面には、判別可能なものには年輪を模式的に記入している。遺物実測図と写真図版の番号は共通する。
5. 土色は小山正忠、竹原秀夫編『新版標準土色帳』（第8版 1988改訂）に一部準拠した。

# 本文目次

第1章 調査に至る経過	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 今年度の調査	1
第2章 調査の概要	3
第3章 遺構	
第1節 河道1	7
第2節 河道2	9
第4章 遺物	
第1節 河道1出土土器	10
第2節 河道2出土土器	15
第3節 河道2 漁撈具・製塩土器	34
第4節 河道2出土墨書土器・土製品・石製品	36
第5節 河道2出土木製品	36
第5章 まとめ	39
報告書抄録	40

# 挿図目次

第1図 調査区位置と周辺の調査	2
第2図 調査区断面模式図	4
第3図 調査区東・西壁断面図(縦:1/40・横:1/200)	5・6
第4図 河道2上層A群土器出土状況	7
第5図 調査区断面図	8
第6図 河道2上層B群土器出土状況	9
第7図 河道1出土土器(1)	11
第8図 河道1出土土器(2)	12
第9図 河道1出土土器(3)	14
第10図 河道2上層A群出土土器(1)	16
第11図 河道2上層A群出土土器(2)	17
第12図 河道2上層A・B群出土土器(A群・81~84、B群・85~87)	19
第13図 河道2上層出土土器(1)	21
第14図 河道2上層出土土器(2)	22
第15図 河道2上層出土土器(3)	23
第16図 河道2上層出土土器(4)	24

第17図	河道2下層出土土器(1) .....	27
第18図	河道2下層出土土器(2) .....	28
第19図	河道2下層出土土器(3) .....	30
第20図	河道2下層出土土器(4) .....	31
第21図	河道2下層出土土器(5) .....	32
第22図	河道2下層出土土器(6) .....	33
第23図	河道2出土漁撈具・製塩土器 .....	34
第24図	河道2出土墨書土器・土製品・石製品 .....	35
第25図	河道2出土木製品(1) .....	37
第26図	河道2出土木製品(2) .....	38

## 図 版 目 次

PL. 1	調査区全景
PL. 2	河道1
PL. 3	河道2(1)
PL. 4	河道2(2)
PL. 5	河道2(3)
PL. 6	河道2(4)
PL. 7	河道2(5)
PL. 8	河道2(6)
PL. 9	河道1出土土器
PL.10	河道2上層出土土器(1)
PL.11	河道2上層出土土器(2)
PL.12	河道2上層出土土器(3)
PL.13	河道2上層出土土器(4)
PL.14	河道2下層出土土器(1)
PL.15	河道2下層出土土器(2)
PL.16	河道2下層出土土器(3)
PL.17	河道2下層出土土器(4)
PL.18	河道2出土漁撈具・製塩土器
PL.19	河道2出土墨書土器・不明土製品・窯体など
PL.20	河道2出土木製品

## 付 図 目 次

男里遺跡平面図

# 第1章 調査に至る経過

## 第1節 調査に至る経緯

大阪府泉南市は、大阪平野の南部に位置し、地形的には和泉山脈から派生する丘陵、洪積段丘がほとんどを占め、沖積地は市域を区分する樫井川及び男里川下流域に限られる。このような地形的制約から、従来より当地の農業用水の確保は、もっぱら溜池を中心とした水路網によるものであった。これらの溜池は、当地の農業において貴重な水源としてその位置を占めており、市域では現在99を数える。

今回の調査地は、主に男里地区の農業用水をまかなう双子池にあたる。平成7年、大阪府泉州耕地事務所が地域総合オアシス整備事業の一環で、双子池の堤体改修工事を計画したが、当該地は男里遺跡にあたることから、文化財保護課に発掘調査の依頼がよせられた。数度の協議及び同年12月26日に行った試掘調査の結果、文化財保護課が堤体改修工事に先立つ事前調査を実施することとなり、大阪府泉州耕地事務所との間に覚書を交わし、平成8年1月8日に「地域総合オアシス整備事業・双子池改修（7）工事に伴う男里遺跡発掘調査」として調査に着手した。

調査体制は文化財保護課調査第1係技師有井宏子、泉南市教育委員会社会教育課文化財保護係河田泰之が現地調査を担当することとなった。調査対象面積は546㎡である。

## 第2節 今年度の調査（第1図）

男里遺跡の位置する泉南市は、和泉山脈から派生する丘陵、洪積段丘が海岸線近くまで迫っている。このような地形的制約の為か、この地域の河川は比較的安定しており、広範囲な沖積地を形成するのは、これらの下流域のほぼ河口付近に限られる。この地形的特性は、大阪平野南部の泉州地域においてその傾向が強く、周辺の主な遺跡が小河川沿いに立地していることから、当地における遺跡の立地を決定する要因の一つとなっているようである。

遺跡内の地形分類をみると、遺跡中央の双子池を中心として南北に旧河道、その左岸には自然堤防と沖積段丘、その右岸には沖積段丘が広がる。現在の男里集落は自然堤防上に、馬場集落は沖積段丘上にそれぞれ位置している。

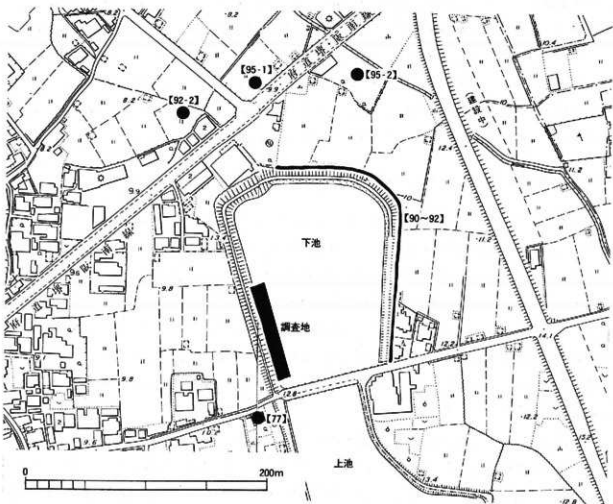
男里遺跡は、大阪府教育委員会、泉南市教育委員会、（財）大阪府埋蔵文化財協会、（財）大阪府文化財調査研究センターによって調査が行なわれている。調査区周辺における過去の調査では、縄文時代晩期のピット群<sup>①</sup>【95-1】、弥生時代中期から古墳時代前期の河道や溝<sup>②</sup>【90-92】、古墳時代前期の河道<sup>③</sup>【92-2】、古墳時代後期の溝<sup>④</sup>【92-2】、奈良時代の掘立柱建物<sup>⑤</sup>【77】、平安時代の掘立柱建物<sup>⑥</sup>【95-2】、鎌倉時代の掘立柱建物<sup>⑦</sup>【77】などが確認されている。

本調査に先立ち包含層や遺構の有無を確認する為、試掘坑を2カ所設けた。この試掘調査の成果に基づき、本調査においてはバックホウにより堤体の盛土、池底のヘドロを掘削した後、以下は人力掘削とした。また、発掘調査の対象となる掘削深度は、現地における協議の結果、堤体改

修工事に伴う地盤改良部分までとした。

地区割りは国土座標第Ⅵ系に基づく5m方形区画とし、過去の調査例及び、将来周辺で行なわれる調査成果との関係を把握できるようにしている。また、実際の調査においては、現地における遺物の取り上げなどを、この区画に基づき行なった。

この方形区画の設定は大阪府都市計画図の1/2500の地形図を基にし、この地形図を12等分した500mの方形区画をつくり、AからLまでの記号を付す。さらにこの一つの区画を25等分し100mの方形区画をつくり、01から25までの番号を付す。この100mの区画を400等分したものが、5×5mの最小単位である。なお、本書における遺物の出土状況などの位置表示は、X、Y座標にて表示している。また、調査の迅速化、省力化を図る為、航空測量による図化作業（1/20）を実施している。なお、今回の調査の掘削深度は、前述の通り堤体改修に伴う地盤改良の及ぶ範囲までとしている為、検出した河道では、後述する通り無遺物層までの調査は行っていない。



第1図 調査区位置と周辺の調査

- ①京南市教育委員会「95-1区」『京南市遺跡発掘調査報告書Ⅲ』（1996）
- ②京南市教育委員会「男里遺跡・Ⅲ」『京南市文化財年報No. 1』（1996）
- ③京南市教育委員会「92-2区」『京南市遺跡発掘調査報告書Ⅰ』（1993）
- ④京南市教育委員会「92-2区」『京南市遺跡発掘調査報告書Ⅱ』（1993）
- ⑤京南市教育委員会「1区」の調査「男里遺跡発掘調査報告書」（1978）
- ⑥京南市教育委員会「95-2区」『京南市遺跡発掘調査報告書Ⅳ』（1996）
- ⑦京南市教育委員会「男里遺跡発掘調査報告書Ⅱ」1978



## 第2章 調査の概要 (第2・3図)

まず、今回の調査地とその周辺との比高差を概観し、周囲との比較を行なうこととする。現在の地形をみると、双子池周辺は、男里遺跡東側の海側へと伸びる長山丘陵から、北西側に向かいレベルを下けているものの、金熊寺川右岸の男神社の立地する自然堤防に向かうにつれ再びレベルを上げていく。つまり、双子池周辺は周囲よりもレベルの低い谷地形の様相を呈する。また、地形分類をみても明らかのように旧河道上に位置し、先に見たように各時代の集落はこの旧河道の両岸に営まれる。

また、調査は現存する堤体のうち、上池との間を通る市道の西側の角から北へ幅約7m、長さ78mの範囲において堤体内法の一部をカットするものである。周囲との比高差は西側の耕作地がT.P.+9.8m、調査区内の池底のレベルがT.P.+8.4m、堤体がT.P.+13.4mである。耕作地と池底のレベル差は1.2m、池底と堤体はおよそ5m、堤体と耕作地は3.6mとなっている。

次に今回の調査においてみられた層序と遺物の示す年代は以下の通りである。

I層 池底のヘドロ及び堤体構築に伴う盛土である。このうち堤体構築に伴う盛土は、かなり細かい分層が可能であるが、これらの土層は、砂礫、粘土、シルト等の混入具合から、大きく3つに分類できる。これらを便宜的に分類すると、5cm程度の礫が多量にみられ、少量のシルト質土を含むもの(A)、先の(A)に多量の粘土ブロックを含むもの(B)、細砂などの砂層のみがみられるもの(C)とする。調査区西壁断面をみると、Cは途切れるところがあるものの、これらはおおよそアルファベット順に上から積まれており、堤体構築に伴う何らかの作業単位、もしくは作業実施の年代差を示すものとも考えられる。しかし、今回の調査成果からでは資料不足の感があり、憶測の域を脱し得ない。

II層 オリーブ色から青灰色のシルトで、堤体構築前の土層である。これらは調査区南側においては20cm程みられるものの、北へ行くにつれややレベルを下げ、調査区半ばで途切れる。ちょうどその付近は、調査区でも堤体構築に伴う盛土が最も厚くみられる所で、堤体構築に伴い削平されたとも考えられる。なお、上面には遺構はみられず、また遺物の出土は極めて少ない為その年代は不明である。ちなみに、このII層は平面及び断面において耕作痕等はみられず、理化学的分析も行っていないが、旧耕土である可能性が考えられる。

III層 河道2の埋土で、灰色から青灰色のシルト、細砂等からなり、ラミナがみられる。池の堤体側から池底に向かい若干レベルを下げており、一部堤体構築に伴い削平されていたり、溜池の水による浸食を受けている。その堆積状況は、調査区全域において一様なものではなく、地点により若干異なることから、複数の流れにより形成されたものと考えられる。なお、III層を構成する土層はシルト質からなり、またラミナがみられることから、極めて緩い流れであったと考えられる。このIII層より炭化植物等と共に多量の土器、木製品が出土した。このIII層の年代は、出土した土器から、7世紀後半から8世紀初頭のものと考えられる。

IV層 III層と同じく河道2の埋土である。灰褐色から青灰色の砂礫からなり、上層の埋土とは

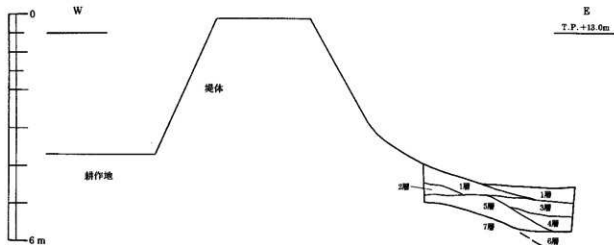
異なり、その殆どが砂礫で構成されていることから、急激な流れによって形成されたものと考えられる。また、その堆積状況は一様ではなく、調査区内の地点によって若干異なることから、複数の流れにより形成されたものと考えられる。III層と同じく多量の土器、木製品が出土しており、その年代は出土した土器からおおよそ7世紀代のものと考えられる。

V層 河道2のベース層であり、河道1の埋土である。灰オリブ色から灰色のシルトからなる。調査区南端の河道2西肩及び調査区中央の河道2東肩がそれにあたる。また、堆積状況を見ると、水平堆積ではなく河道2の最深部に向かい堆積しており、しかもシルト質であることから、河道の埋土であると考えられる。つまり、河道2以前にはほぼ同じ様にさらに古い河道が存在しており、7世紀代に河道2を形成した急激な氾濫により浸食を受けた為、今回の調査では部分的にしかみられないものと考えられる。なお、このV層の年代は、出土した土器から庄内式併行期から布留式期と考えられる。

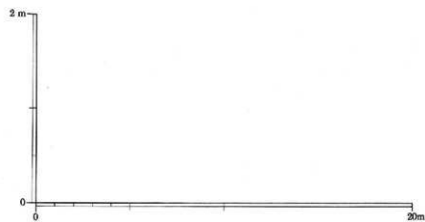
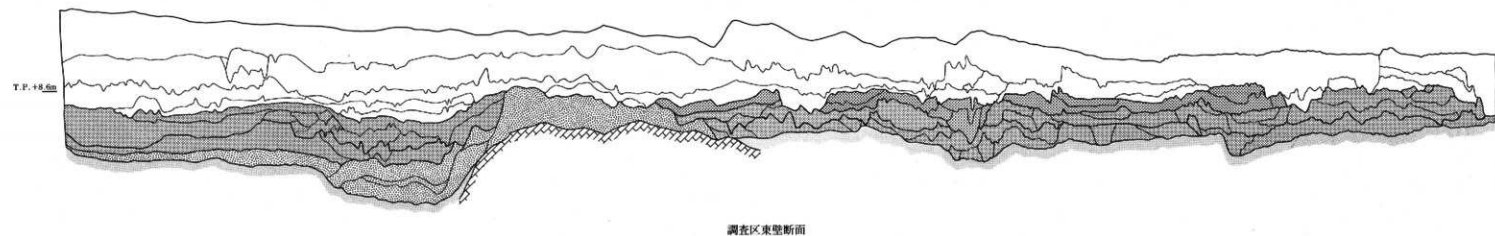
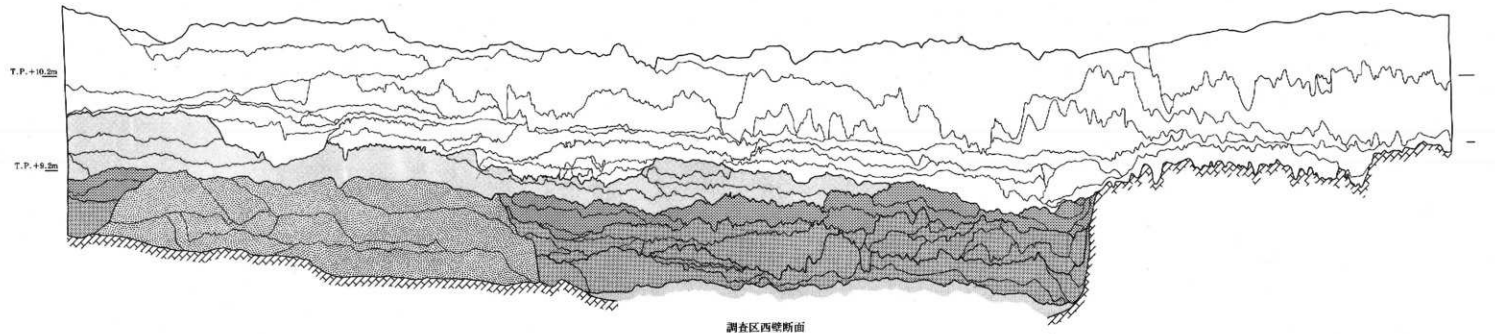
VI層 河道1以前の河道の埋土である。灰白色の巨礫混じりの砂礫層で、一見基盤層のようであるが、部分的なトレンチ調査を行ったところ、溜池の中心に向かい緩やかな勾配を持ち、土師質土器の細片が数点出土していることから、河道の埋土と判断した。なお、今回の調査では、前述の通り現地協議の結果、このVI層上面までが調査対象となった為、全面的な掘削は行っていない。また、その年代は直接的な資料である出土土器が細片の為明確な時期は判断しかねるが、V層直下であることから少なくとも庄内式併行期以前と考えられる。

VII層 地山であり、今回検出した河道の基盤層となる。調査区北側では急激にレベルをあげ、河道1及び河道2の西肩になっている。調査区全体では、多少の凹凸がみられるものの北西から南東方向にレベルを下げていく。

今回の調査では、上記の通り重複する河道を3つ確認した。なお、現地調査では、それらのうちVII層をベースとするものと、V層をベースとするものを、それぞれ 河道1、河道2とし調査対象とした。



第2図 調査区断面模式図



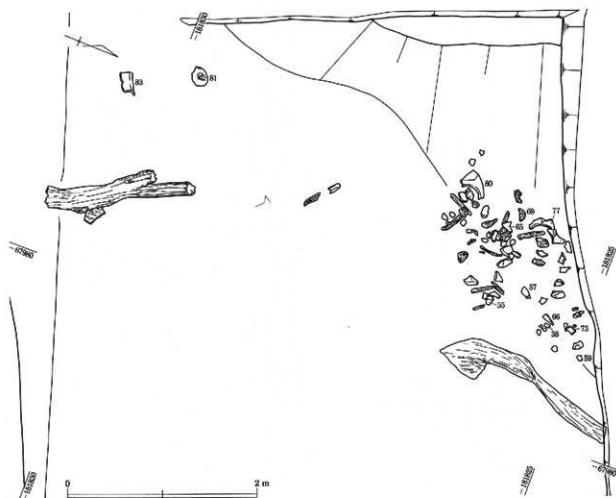
第3図 調査区東・西壁断面図(縦: 1/40・横 1/200)

### 第3章 遺構 (第4～6図・PL. 1～8)

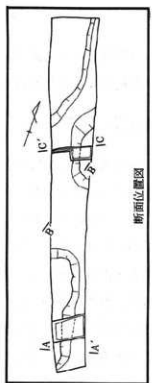
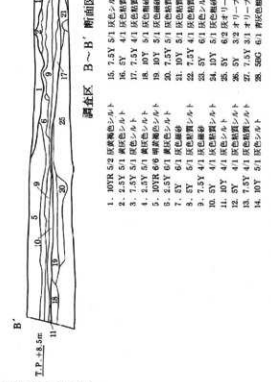
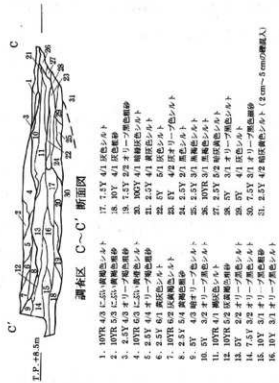
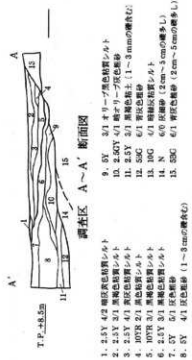
今回検出した遺構は先述の通り、庄内式併行期から布留式期にあたる河道1と、7世紀代から8世紀初頭にあたる河道2である。以下に個々の詳細をみていくこととする。

#### 第1節 河道1

基本層序でのVI層及びVII層をベースとする河道で、調査区を南東から北西方向に縦断する。西肩のみの検出で、最大検出幅49m、深さ1.3mである。おおよそ庄内式併行期から布留式期を中心とした時期の土器が出土した。なお、その埋土は、河道2による浸食と、堤体構築に伴う削平、溜池の浸食などにより、部分的にしか遺存しておらず、その平面分布は河道2の平面図における、調査区南端の西肩及び調査区中央の東肩に相当する。また、調査区南端付近の断面A～A'では⑬層、調査区中央付近の断面B～B'では⑭層、同じくC～C'では⑮～⑯層で、いずれも緑灰色から灰色のシルト質からなる。これらの堆積状況は、比較的緩やかな流れによって形成されたものと考えられ、このことから河道1はある程度安定したものであったと言える。



第4図 河道2上層A群土器出土状況



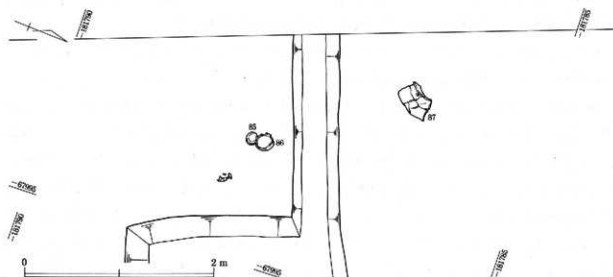
第5図 調査区断面図

## 第2節 河道2

基本層序でのⅤ～Ⅶ層をベースとする河道で、調査区を東西へ蛇行しつつ、ほぼ南から北方向へ縦断する。最大検出幅20m、深さ0.5mである。なお、今回検出した川岸のうち、調査区南端の西肩、調査区中央付近の東肩は、堤体構築に伴う削平や、溜池の浸食により本来のレベルではない為、その規模は検出したものよりやや大きいものであったと考えられる。埋土は細分が可能であるが、各々の土質の違いから大きく上層と下層の二つに分け、遺物の取り上げを行った。

上層は、調査区南端付近の断面A～A'では②～⑤層、調査区中央付近の断面B～B'では②～⑪層、同じく断面C～C'では①～⑧層で、いずれも灰色から黒褐色のシルトや細砂からなり、部分的にラミナがみられる。この上層はほぼ同一レベル上に広がっており、このことから川幅が広く、かつ川底の浅い所に澱み状の緩やかな流れのもとに形成されたものと考えられる。この上層からは、おおよそ7世紀後半から8世紀初頭を中心とした遺物がまとも出土し、一部木製品や土製品、石器、漁撈具の他に、焼け歪みのみられる須恵器や窯体片もみられた。なお、これらの出土状況は何かの意図に基づくものではなく、おそらく廃棄されたものと考えられる。また、遺物の出土傾向は、調査区南側ほど多く、北側に行くにつれ少なくなっていくようである。

下層は、調査区南端付近の断面A～A'では⑥～⑬層、調査区中央付近の断面B～B'では⑬～⑳層、同じく断面C～C'では⑨～⑳層で、部分的にシルト質のものもみられるものの、おおむね灰色の粗砂からなる。浅い窪み状の川底に堆積しており、その殆どが粗砂などであることから、ある程度の急激な流れ、たとえば氾濫などにより形成されたと考えられる。この下層からは、7世紀代を中心とした遺物が出土した。



第6図 河道2上層B群土器出土状況

## 第4章 遺物

出土した遺物は、29.5ℓのコンテナにて約180箱にのぼる。以下に図示するものは、それらのうちの代表的なものである。

### 第1節 河道1出土土器(第7～9図・PL.9)

出土した遺物は、甕・直口壺・複合口縁壺・高杯・器台・台付鉢・飯蛸壺・製塩土器である。

1～17は、甕である。弥生系の甕(1～12)、庄内式甕(13～15)、布留式甕(17)などがみられる。弥生系の甕には、口縁及び体部の一部(1～8)、平底を呈する底部(9～12)がみられる。これらは口径と、口縁部の差異による分類が可能である。口径が20cm前後のもの(1・2・4・6・8)、15cm前後のもの(3・5・7)があり、器高も15cmのもの(3)、25cm前後のもの(4)がある。なお、出土したのは口縁部のみのもので、今回は口径と器高の比率による器種分化の可能性を指摘するに留める。口縁の形態は、口縁端部に鈍い稜線を持つ丸くおさめるもの(1～4・7・8)、口縁端部にキザミ目を持つもの(5・6)がある。調整は、外面はいずれもタタキが施されており、口縁端部はヨコナデ、内面はナデが施されている。このうち、2の内面には板ナデが、3・9～11の底部内面には板状工具による圧痕がみられる。

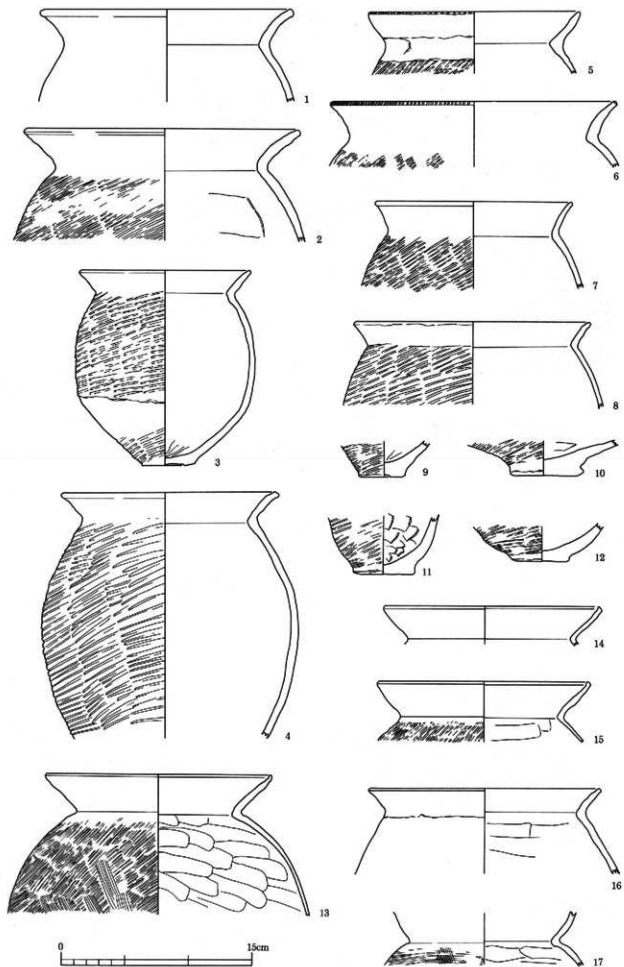
13～15は、庄内式甕である。口縁端部内面のツマミ上げがやや内傾しており、外面は鈍い稜線を持つ。また、体部内面には左上がりのヘラケズリがみられる。このうち13・15は、体部外面に細かいタタキがみられ、頸部下のタタキがナデ消されており、13は体部中央付近には、タタキの後施したハケ目が一部みられる。口径は、17cm前後、胎土はいわゆる生駒西麓産のものである。

16は、口縁端部を丸くおさめ、体部外面はタタキの後、ナデが、体部内面には板ナデが施されている。頸部には接合痕が残る。胎土は黄褐色を呈し、砂粒を多く含む。

17は、布留甕で頸部のみ出土である。体部外面に横方向のハケ目の後、部分的に縦方向のハケ目を施す。また、体部内面は横方向のヘラケズリを施す。

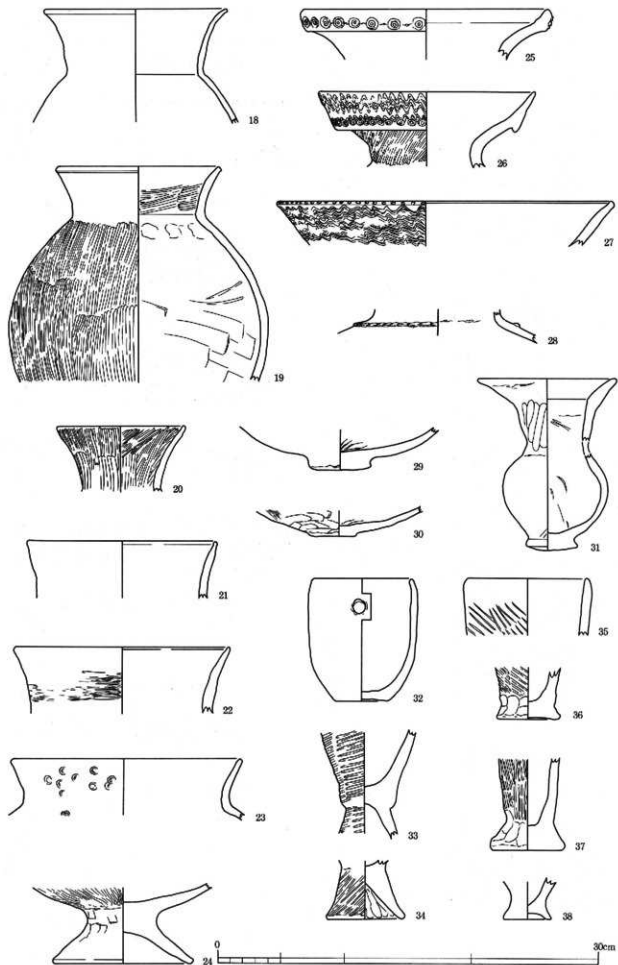
18～23は、直口壺である。これらは、口縁端部の形態が若干異なり、鈍い稜線を持つもの(18・19)、端部を丸くおさめるもの(20～23)がみられる。18は、口縁部内外面ともヨコナデ、体部内外面はナデがみられ、19は、口縁部内面がヨコナデの後下半に横方向のヘラミガキ、体部外面には縦方向のヘラミガキがみられ、体部内面は、大半がナデで一部横方向の板ナデを施す。20は、口縁部内面は縦方向のヘラミガキの後、上半に右上がりのヘラミガキを施す。胎土は褐灰色を呈し、精良である。21は、口縁端部内面に鈍い稜線を持つ。内外面ともヨコナデを施す。22は、内外面ともヨコナデの後、下半に細かいヘラミガキを横方向に施す。浅黄色を呈し、精良である。23は、内外面ともヨコナデを施した後、外面に竹管文を不規則に施す。

24は、台付壺の脚部である。脚基部に接合痕が残る、一部板状工具による圧痕がみられる。体部の外面には縦方向のヘラミガキ、内面には不定方向のナデがみられ、脚部は内外面ともナデを施す。



第7図 河道1出土土器(1)





第8图 河道1出土土器(2)

25～27は、加飾壺である。25は、口縁部が上方へ伸び、内面に接合痕がみられることから、上方へと口縁部を拡張していることがわかる。内外面ともヨコナデがみられ、口縁端部の拡張面には円形浮文を施す。26・27は、いわゆる複合口縁壺である。26は、口縁部上段外面にクシ描波状文、円形浮文がみられ、頸部外面には縦方向のヘラミガキを施す。また、内面はヨコナデを施す。27は、口縁部上段外面にヨコナデの後、三単位のクシ描波状文がみられ、口縁端部に竹管文を施す。口縁端部は鈍い面を持ち、内外面ともヨコナデを施す。

28は、壺の頸部である。内外面はナデがみられ、外面には粘土紐を貼り付け、板状工具でキザミ目を施す。

29・30は、壺の底部である。いずれも平底を呈し、内面はナデで、一部に板状工具による圧痕がみられる。このうち29は、外面にナデがみられ、30は、ナデと一部板ナデを施す。

31は、壺のミニチュアで、頸部外面に縦方向のヘラミガキを施す。口径11.8cm、器高13.5cmである。

32は、飯蛸壺である。口縁部に紐穴を持つ。

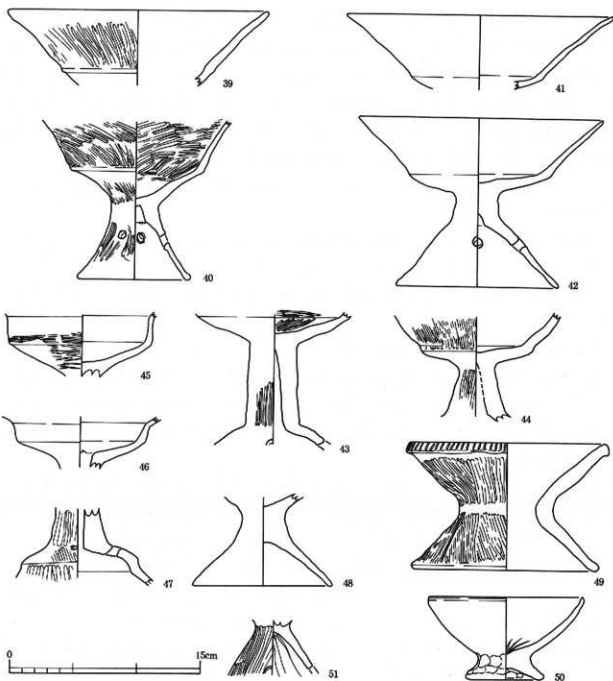
33～38は、製塩土器である。33・34・36～38は脚部である。38は、内外面ともナデがみられ、それ以外は外面にタタキを施す。33は、脚部と体部の接合が粗く、接合面が明瞭に残る。37は、タタキが他のものとは異なりほぼ縦方向にみられる。35は口縁部で、36・37に対応するものである。口径11.4cmである。

39～45・48は、高杯である。39・40は、杯部が碗状にやや窪み、杯底部と口縁部の屈曲点に明瞭な稜線を持つ。39は、口縁部がやや外反しつつ直線的に立ち上がり、杯部及び脚部外面にヘラミガキがみられる。40は、杯部がやや内湾しつつ立ち上がり、中空の脚部は外反しており、内外面とも縦方向のヘラミガキを施す。脚部には3方透かしがみられる。外面は縦方向のヘラミガキがみられ、内面はナデを施す。41・42は、杯底部がほぼ平坦で、杯部の屈曲部にやや鈍い稜線を持ち、口縁部に向かい直線的に大きく広がる。共に摩擦が激しく調整は不明である。このうち42の脚部は脚柱部の高さが、脚裾部の約1/3と短い。また、脚裾部には4方透かしがみられる。

43は、中空の脚柱部で、脚柱部外面と杯部内面にヘラミガキを施す。また、脚裾部には透かし穴がみられる。44は、杯底部はほぼ平坦で杯部の屈曲部に鈍い稜線を持ち、稜線直上内側にくびれた後、内湾しつつ立ち上がる。杯部と脚柱部の外面に縦方向のヘラミガキを施す。45は、有段高杯の杯部である。屈曲部は明瞭な稜線を持ち、外面には細かい横方向のヘラミガキを施す。48は、中実の脚部である。

46・47・49は、器台である。46・47は口縁部及び脚裾部に段を持ち、その屈曲部に明瞭な稜線を持つ。このうち、脚部にあたる47は、外面に縦方向のヘラミガキがみられ、内面にはナデを施す。脚柱部の基部には4方透かしがみられる。49は、「く」の字状にひろく中空の器台である。外面には縦方向のヘラミガキがみられ、口縁端部は鈍い面を持ち、縦方向のキザミ目を施す。

50は、台付碗である。指頭痕を残す脚部からやや内湾しつつ立ち上がり、口縁端部外面に窪みがめぐる。



第9図 河道1出土土器(3)

51は小型器台である。脚裾部にあたり、外面には縦ヘラミガキ、内面はナデが施され、板状工具による圧痕が一部みられる。

## 第2節 河道2出土土器（第10～22図・PL.10～17）

7世紀後半から8世紀初頭のものが出土している。先述した通り、河道2では上層にはシルト層、下層では主に砂礫層が堆積しており、このうち上層では部分的に密集して土器が出土している。まず、これらの土器群をみていき、それ以外は、上層、下層で一括して取り上げることとする。

### 1. A群の土器（52～84）

土師器では、杯、皿、高杯、鉢、甌、甕、鍋、須恵器では杯、甕、平瓶がみられる。

52～54は土師器の杯である。52は、やや外反する口縁部と底部との境に鈍い稜線を持ち、内外面ともヨコナデを施す。53・54は、平底気味の底部から、外反する口縁を持ち、口縁端部が内側に屈曲する。ともに底部外面は横方向のヘラケズリがみられ、口縁部及び底部内面にはヨコナデを施す。なお、53には二段の放射状暗文がみられる。

55～57は、土師器の皿である。平底の底部に短く立ち上がる口縁部を持つもの（55・56）、平底気味の底部から緩やかに立ち上がる口縁部を持つもの（57）がある。55は、底部外面に横方向のヘラケズリがみられ、口縁端部及び内面はヨコナデを施す。底部内面にはさらに放射状暗文を施す。56は、底部に粗いナデ、口縁端部及び内面にはヨコナデを施す。底部内面にはさらに放射状暗文を施す。57は、内外面ともヨコナデを施す。

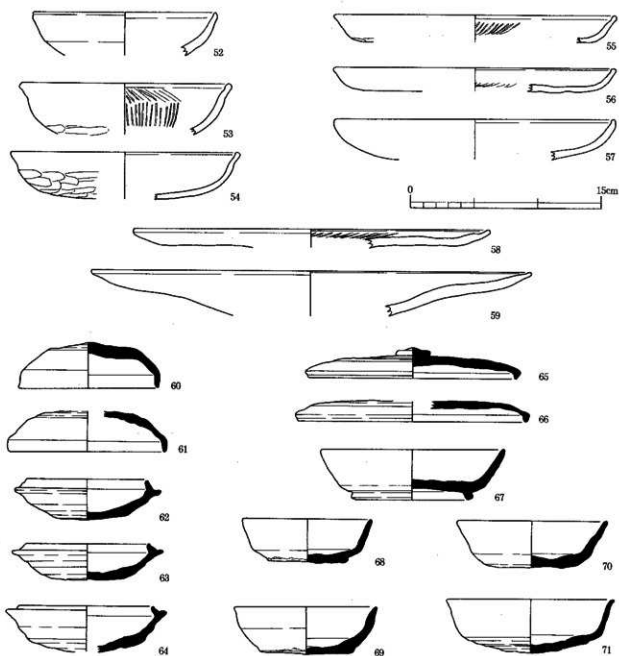
58・59は、土師器の高杯である。ともに杯部にあたり、脚柱部から外反しつつ広がり、その半ばではほぼ平坦にひろく。いずれも杯底外面はナデがみられ、口縁端部及び底部内面にはヨコナデを施す。このうち58の底部内面にはさらに放射状暗文を施す。

60～71は、須恵器の杯・杯蓋である。杯蓋は、碗形のもの（60・61）、つまみが付き端部が下方へ屈曲するもの（65・66）がみられる。これらの調整は、天井部に回転ヘラケズリがみられ、内外面とも回転ナデを施すもの（60・66）、天井部にヘラ切り痕が残り、内外面とも回転ナデを施すもの（61）、内外面とも回転ナデで仕上げるもの（65）がある。

杯には、受部の付くもの（62～64）、平底の底部に高台が付き外反する口縁部を持つもの（67）、平底の底部とやや外反する口縁部との境に稜線を持つもの（68・69）、平底の底部にやや外反する口縁部を持つもの（70）、平底気味の底部に外反する口縁部を持つもの（71）がみられる。これらの調整は、杯底外面に回転ヘラケズリがみられ、口縁部内外面に回転ナデを施すもの（62～64）、底部外面は粗い調整で高台が付き、内外面に回転ナデを施すもの（67）、底部外面にヘラ切り痕が残り、内外面とも回転ナデを施すもの（68～70）、底部外面に回転ヘラケズリを施し、口縁部内外面とも回転ナデを施すもの（71）がみられる。

72は、土師器の鉢である。内湾する口縁部で、口縁端部は内傾する面を持つ。内外面ともナデを施す。

73は、甌の口縁部である。やや外反する口縁部で、外傾する面を持つ。外面は縦方向のハケ目、



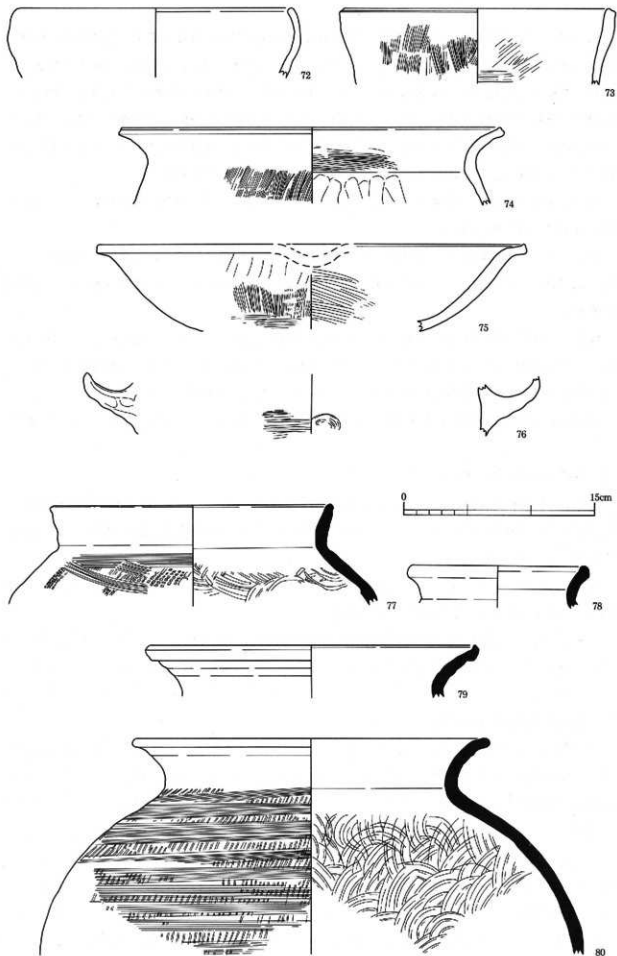
第10図 河道2上層A群出土土器(1)

内面は斜め及び横方向のハケ目がみられ、口縁端部はヨコナデを施す。

74は、土師器の甕である。外反しつち立ち上がる口縁の端部に外傾する面を持ち、口縁端部内面はやや突起する。体部外面はハケ目がみられ、内面は縦方向に強く指頭痕を残す。口縁部内面はハケ調整の後、口縁端部内外面のヨコナデにより一部ナデ消されている。

75は、鍋である。底部から碗状にひらき、口縁部付近で屈曲しほぼ平坦になる。口縁端部は面を持ち、口縁端部内面はやや突起する。体部内外面にはハケ目を施す。なお、口縁部には煤の付着が激しい。

76は、把手付甕である。体部の把手部分で、その形状はいびつな半円形である。外面にはハケ目がみられるが、内面には同心円文が残ることから、ハケ調整以前に体部にタキ調整が行われたことが考えられる。



第11圖 河道2上層A群出土土器(2)

77～80は、須恵器の甕である。77は、ほぼ直立する口縁部で口縁端部を丸くおさめる。体部外面には格子ふうタタキの後、一部カキ目、内面には同心円文が残り、その他は回転ナデである。78は、外反する口縁部で口縁端部は肥厚し丸くおさめる。内外面とも回転ナデを施す。79は、口縁端部に外傾する面がみられ、その下に凹面を持つ。内外面とも回転ナデを施す。80は、外反する口縁部に、口縁継ぎ足しの名残であろうか凸部がみられる。体部外面は平行タタキの後、横方向のカキ目を施し、体部内面は同心円文が残る。その他は回転ナデを施す。

81は、平瓶である。口縁部は、外方へほぼまっすぐ立ち上がり、肩部に凹線がめぐる。肩部中央に成形時の接合痕を残す。

82は、直立する口縁を持つ壺である。頸部の形状がややびつであり、平瓶のように斜めに体部に取り付くとみられるが、定かではない。口縁部外面に凹線をめぐるせ体部内面には同心円文が残る。

83は、土師器の甕である。外反する口縁部で口縁端部は面がみられ、端部内面に小さな突起を持つ。体部外面にはハケ目がみられ、内面には縦方向のヘラケズリを施す。口縁部内面にはハケ目がみられるが、口縁端部内外面のヨコナデにより一部ナデ消されている。

84は、皿である。平底の底部と外反する口縁部の境に稜線を持つ。内外面ともヨコナデを施す。

## 2. B群出土の土器 (85～87)

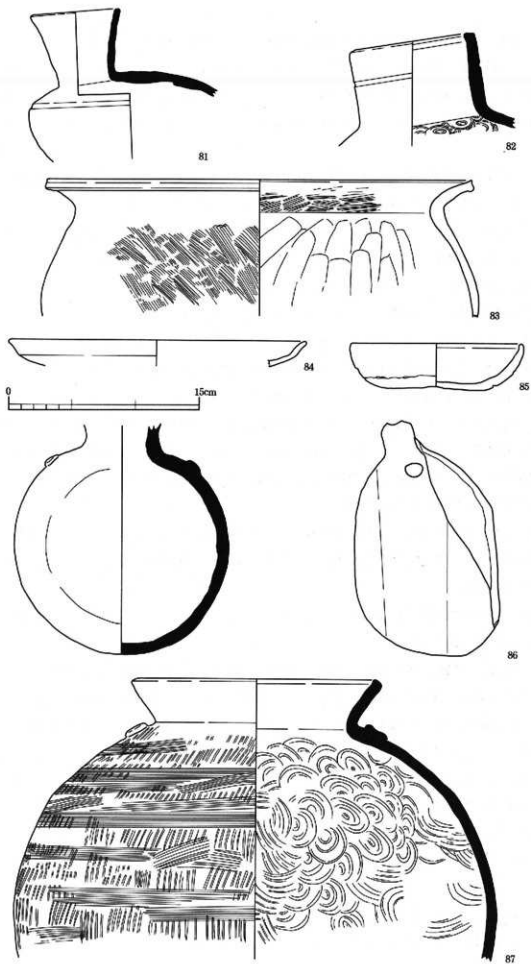
85は、土師器の杯である。やや窪んだ底部から内湾しつつ立ち上がる口縁部で、接合痕を残す。底部内面及び口縁部外面はヨコナデで、底部外面付近は粗いナデを施す。胎土は粗く、2mm前後の砂粒を多く含む。

86は、須恵器の提瓶である。口縁部は外反し、体部両肩の吊り手は円形の粘土塊を付す。体部側面は比較的平坦で、全体に回転ナデを施す。

87は、須恵器の甕である。口縁部は短く外反し、体部はほぼ球形である。体部外面には平行タタキの後カキ目がみられ、体部内面には同心円文が残る。口縁部内外面は、回転ナデを施す。

## 3. その他の上層出土の土器 (88～169)

88～100は、土師器の杯である。88～90は、丸底の底部と外反する口縁部との境に鈍い稜線を持つ。底部内面及び外面の稜線付近まではヨコナデがみられ、底部外面は粗いナデを施す。底部内面には放射状暗文がみられる。91・92は、土師器の杯蓋である。天井部に扁平なつまみが付くタイプで、ヨコナデの後、斜方向のヘラミガキを施す。内面は、口縁端部はヨコナデがみられ、それ以外はナデが施されている。口縁端部が、外反して丸くおさめるもの(91)、下方へ短く屈曲するもの(92)がある。93・94は、平底の底部に高台が付き、口縁端部は外反する。底部内面及び口縁部外面にはヨコナデがみられ、このうち93にはさらに内面にラセン状暗文、放射状暗文を施す。95～97は、ほぼ平底の底部に内湾しつつ立ち上がる口縁部を持つ。口縁部内外面はヨコナデがみられ、その他は粗いナデを施す。胎土は粗く、2mm程度の砂粒を多く含む。98～102は、



第12図 河道2上層A・B群出土土器 (A群・81~84、B群85~87)



平底の底部に外反する口縁部で、口縁端部内面に小さな突起を持つ。底部外面には横方向のヘラケズリ、口縁端部内外面及び底部内面にはヨコナデがみられ、このうち98にはラセン状暗文と放射状暗文が、100～102には放射状暗文がみられる。また、これらは法量の差異による分類が可能で、口径が13cm前後のもの(98)、18cm前後のもの(99・100)、23cm前後のもの(101・102)がある。

103～107は、土師器の皿である。103～105は、ほぼ平底の底部とやや内湾する口縁部との境に稜線を持つ。口縁端部は外傾する鈍い面を持つもの(103・104)、内面に小さく突起するもの(104)があり、いずれも内外面にヨコナデを施す。106は、ほぼ平底の底部に内湾する口縁部がとりつく。底部外面はヘラケズリがみられ、底部内面及び口縁部内外面はヨコナデを施す。107は、平底の底部に短く立ち上がる口縁部で、さらに外反し内面に小さな突起がみられ、口縁端部との境に稜線を持つ。内外面ともヨコナデがみられ、底部外面には横方向のヘラミガキ、内面には二段のラセン状暗文と放射状暗文を施す。

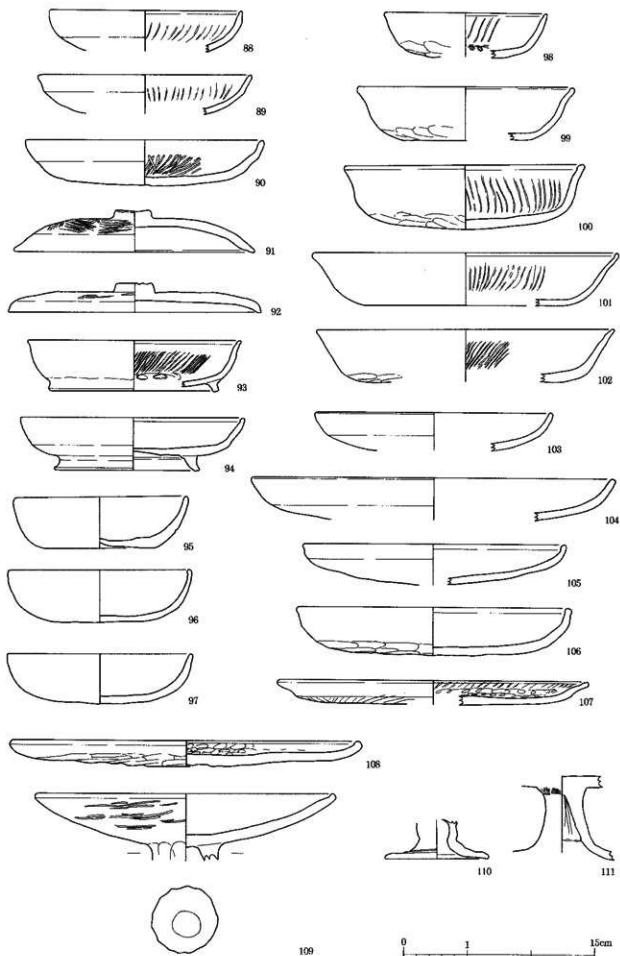
108～111は、土師器の高杯である。このうち108～109は、杯部である。ほぼ平坦で口縁端部が内湾し内面に小さな突起を持つもの(108)、傘状にやや内湾しつつひらき、口縁端部内面に弱く小さな突起を持つもの(109)がある。杯部外面は、横方向のヘラケズリを施すもの(108)、ヨコナデの後横方向のヘラミガキを施すもの(109)がある。ともに口縁端部及び杯部内面はヨコナデがみられ、このうち108は、二段のラセン状暗文を施す。109は、面取りをした脚部が付き、108も同様のものが付くと考えられる。

110は、高杯脚部である。中空の脚柱部から、大きく外反する脚裾部が付き、内外面とも微妙な凹凸がみられる。脚裾端部は丸くおさめやや内湾する。口縁端部にはヨコナデがみられ、その他にはナデを施す。

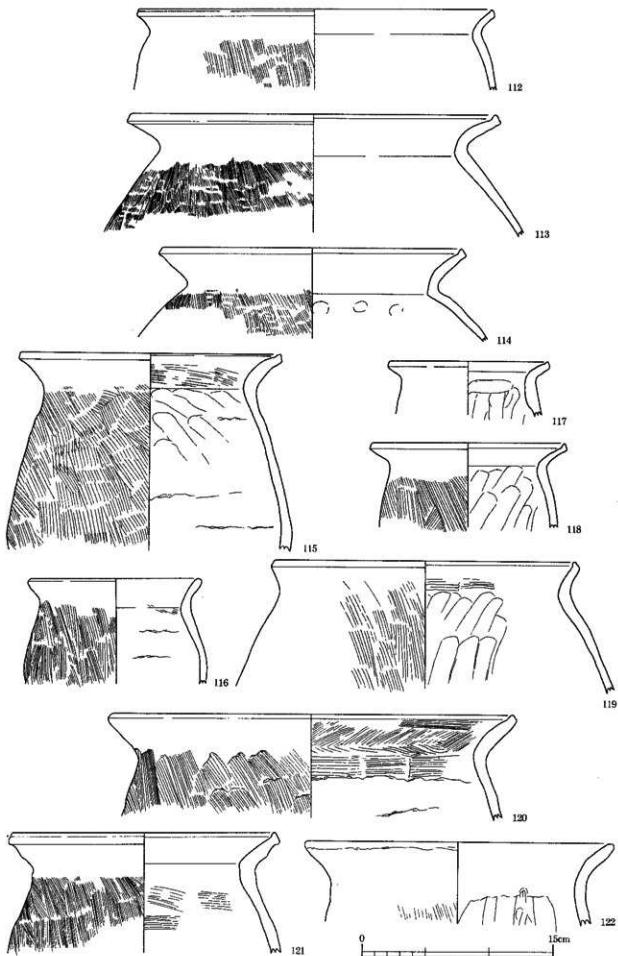
111は、高杯の脚柱部である。外面にはナデがみられ、内面には絞り目が残る。杯部との接合部にはハケ目が一部みられる。

112～122は、土師器の甕である。外面にハケ目を施すが、内面の調整、口縁部の形態などが異なる。112～116は、体部内面にナデ調整を施す。このうち、ナデがみられるもの(112・113)、ナデに加え指頭痕がみられるもの(114)、粘土が乾ききった状態でなかったのか縦方向のナデ調整の痕跡をくっきり残すもの(115・117)、ごく粗いナデで粘土紐の接合痕が残るもの(116)、縦方向のヘラケズリを施すもの(118・119)、横方向のハケ目を施すもの(120・121)、縦方向の板ナデを施すもの(122)がある。なお、これらは口縁部付近のみの観察の為、115のように体部の調整が一様でないものも多いと考えられる。次に、これらの口縁部の形態には、外反し口縁端部に面を持つもの(112・117)、外反する口縁部と口縁端部内面に小さな突起を持ち外傾する面を持つもの(113～115・120・121)、口縁端部の外傾する面が鈍く内面が上方へ大きく突起するもの(118)、口縁部は短く口縁端部に外傾する面を持ち、内面に小さな突起のみみられるもの(119)、口縁端部を丸くおさめるもの(116・122)などがある。

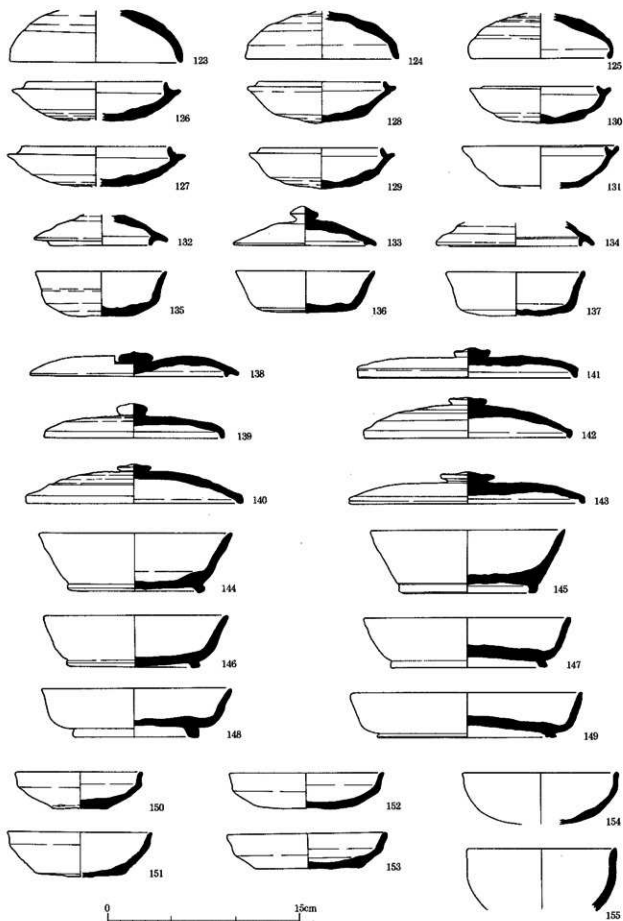
123～155は須恵器の杯・杯蓋である。杯蓋には碗形のもの(123～125)、つまみを持ち、内面



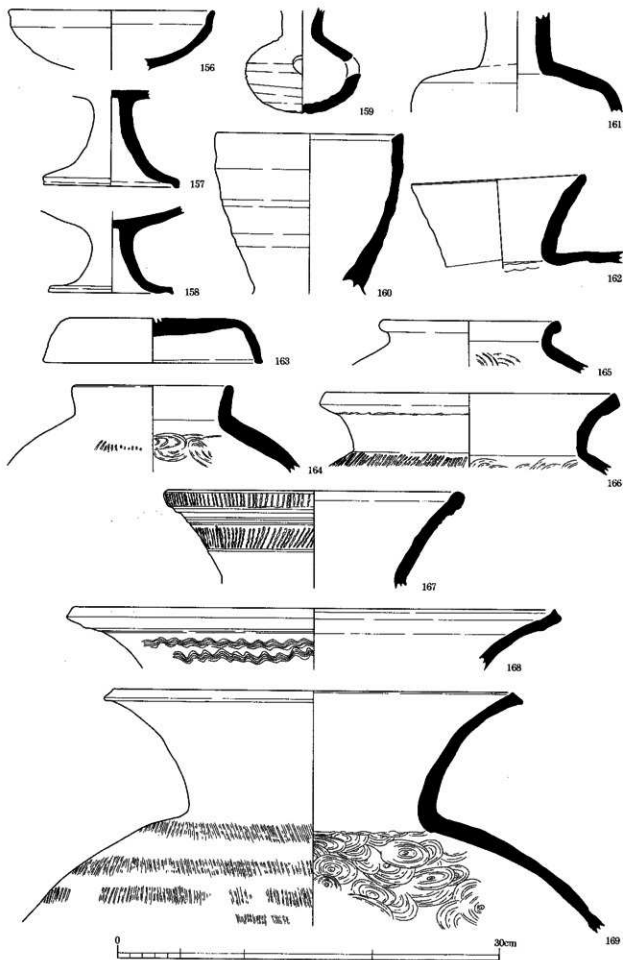
第13図 河道2上層出土土器(1)



第14图 河道2上層出土土器(2)



第15图 河道2上層出土土器(3)



第16图 河道2上层出土土器(4)

にかえりを持つもの (132~134・138)、つまみを持ち口縁端部が屈曲するもの (139~143) がみられる。また、これらの調整は、天井部に回転ヘラケズリがみられ、その他には回転ナデを施すもの (123~125・138・140)、全体に回転ナデを施すもの (132~134・139・141~143) がある。杯には、受部を持つもの (126~131)、平底の底部から外反気味に立ち上がる口縁部を持つもの (135~137)、平底の底部に高台の付くもの (144~149)、平底の底部を持ち、やや外反する口縁端部との境に稜線を持つもの (150~153)、丸底の底部から碗形に内湾しつつ立ち上がる口縁部を持つもの (154・155) がみられる。また、これらの調整は、底部外面に回転ヘラケズリがみられ、口縁部内外面及び底部内面に回転ナデを施すもの (126~129)、底部外面にヘラ切り痕がみられ、口縁部内外面及び底部内面に回転ナデを施すもの (130・131・135~137・150~153)、底部の調整が粗く口縁部内外面とも回転ナデを施すもの (144~149)、底部にヘラ切り痕が残る、口縁部内外面とも回転ナデを施すもの (150~153)、内外面とも回転ナデを施すもの (154・155) がある。

156~158は、須恵器の高杯である。杯部は丸みを持った底部と、外反する口縁との境に稜線を持つもの (156) がある。脚部は中空の脚柱部から大きくひろく脚裾部で、脚裾端部は面を持ち、下方に伸びる小さな突起がみられるもの (157・158) がある。

159は、甕である。体部外面下半にヘラケズリがみられ、上半はナデを施す。

160は、鉢である。内湾する口縁部で口縁端部は内傾する面を持つ。体部内外面とも、回転ナデがみられ、外面には凹線状の窪みがめぐる。

161は、長頸壺の肩部である。肩部と体部の境に明瞭な稜線を持つ。内外面とも回転ナデを施す。なお、器壁外面には多量の自然釉が付着している。

162は、平瓶の頸部である。口縁部は外反し口縁端部は丸くおさめる。内面の肩部との境に接合痕がみられ、成形時の指頭痕を残す。

163は、壺の蓋である。欠損しているがつまみが付く。平坦な天井部からやや内湾する口縁部で、端部は内傾する面を持つ。内外面とも回転ナデである。

164は、壺である。肩の張った体部にやや外反する短い口縁部を持つ。体部外面には平行タタキが、内面には同心円文が残る。口縁部は内外面とも回転ナデである。

165~169は、須恵器の甕である。165は、短く外反する口縁部で、外面に肥厚し丸くおさめる口縁端部をもつ。外面及び口縁部内面は回転ナデがみられ、体部内面には同心円文が残る。166は、外反する口縁部に外傾する鈍い面を持つ。口縁端部は折り返したのであろうか、粘土の雫ぎ日が残る。体部外面は平行タタキがみられ、内面は同心円文が残る。口縁部内外面は回転ナデを施す。

167は、外反する口縁部で口縁端部がやや肥厚する。口縁部上半に二段の列点文がめぐり、その間に2条、列点文下段の下に1条の凹線をめぐらす。内外面とも回転ナデを施す。168は、外反する口縁部に外傾する面を持ち、内側に小さな突起がみられる。口縁端部の面の下には凹線状の窪みがめぐり、その下には2条のクシ描波状文を施す。内外面とも回転ナデを施す。169は、

球形の体部に外反する口縁部を持ち、口縁端部に外傾する面がみられる。体部外面は平行タタキがみられ、内面には同心円文が残る。口縁部内外面とも回転ナデを施す。

#### 4. 下層出土の土器 (170~255)

170~173は、土師器の杯である。170は、丸底の底部に内湾する口縁部で、口縁端部は上方へ小さな突起がみられる。底部外面には横方向のヘラケズリがみられ、底部内面と口縁部内外面はヨコナデを施す。また、口縁部内面にはさらに放射状暗文を施す。171は、丸底の底部に外反する口縁部を持つ。口縁端部は小さな突起を持ち、外面に鈍い稜線がめぐる。内外面ともヨコナデを施す。172・173は、やや平底の底部に外反する口縁部で、口縁端部内面に小さな突起を持つ。口縁部外面及び底部内面はヨコナデがみられるが、底部外面は粗いナデを施す。胎土は粗く2mm程度の砂粒を多く含む。このうち172の口縁部外面にはヘラ記号がみられる。

174~176は土師器の高杯である。174は、杯部で外面には強いナデの痕跡がみられる。175は、脚部である。中空の脚部で、脚柱部から脚裾部にかけて大きくひろく、脚裾端部には外傾する鈍い面を持ち、内面は下方に小さく突起する。内外面ともナデがみられ、脚柱部の一部には指頭痕が残る。176は、脚部で中空の脚部に底部に丸みを持った杯部が付く。外面は杯部に一部ハケ目がみられるものの、ナデが施されており、指頭痕を残す。杯部内面にはハケ目を施す。

177は、土師器の鉢である。丸底の底部に内湾する口縁部を持ち、体部外面にはハケ目がみられ、内面にはナデを施す。

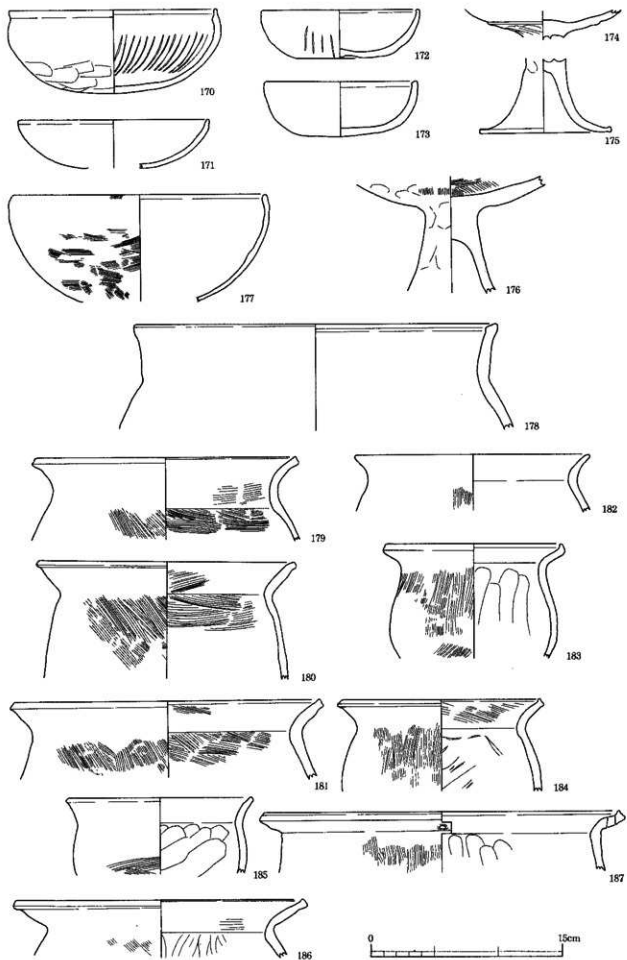
178~187は、土師器の壺である。いずれも外面にハケ目を施すが、内面の調整、口縁部の形態などが異なる。横方向のハケ目を施すもの(179~181)の他に、ナデを施すもの(178・182)、縦方向のナデ調整の痕跡をくっきり残すもの(183・184)、斜方向のヘラケズリを施すもの(185・187)、板ナデを施すもの(186)がある。なお、これらは口縁部付近のみの観察の為、体部全体にあてはまるものではないと考えられる。次にこれらの口縁部の形態には、外反する口縁部と、口縁端部内面に小さな突起がみられ外傾する面を持つもの(179~181・184・186・187)、口縁端部の外傾する面が鈍く、内面が上方へ大きく突起するもの(183)、口縁端部を丸くおさめるもの(182・185)、上方向へまっすぐ立ち上がり内傾する面を持つもの(178)などがある。なお、187には、口縁部に上方からの穿孔がみられる。

188は、土師器の把手付甕である。半円形の扁平な把手で、指頭痕を残す。外面にはハケ目がみられ、内面にはヘラケズリを施し、一部にナデがみられる。

189は、土師器であるが器種は不明である。口径46.6cmで、ほぼ直立する口縁の端部が肥厚し、ほぼ水平な面を持つ。内外面にはハケ目がみられ、口縁端部はヨコナデを施す。

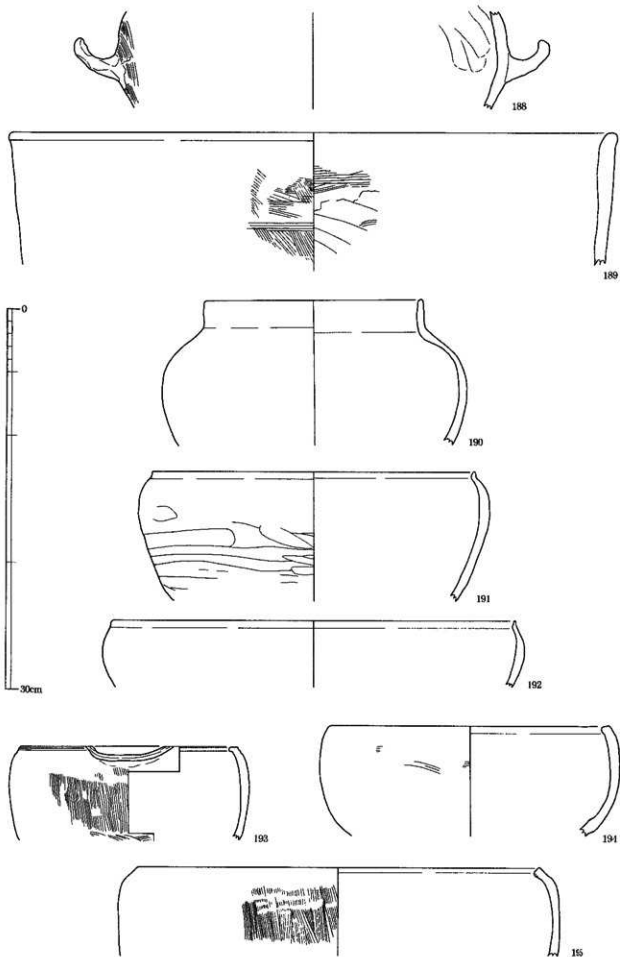
190は、土師器の甕である。球形の体部に短く直立する口縁部を持つ。調整は摩耗が激しく不明である。

191~195は、土師器の鉢である。口縁端部の形態、体部外面の調整で分類が可能である。口縁端部の形態では、内湾する口縁部の端部が上方へつまみ出されているもの(191・192)、内湾す



第17圖 河道2下層出土土器(1)





第18図 河道2下層出土土器(2)

る口縁部の端部にほぼ水平の面を持つもの(193~195)がある。体部外面の調整では、横方向のヘラケズリを施すもの(191)、ヨコナデを施すもの(192)、縦方向のハケ目を施すもの(193・195)、横方向のハケ目を施すもの(194)である。

196~229は、須恵器の杯・杯蓋である。杯蓋は碗形のもの(196~199)、天井部につまみが付き、端部にかえりを持つもの(206・207)、天井部につまみが付き、端部が下方へ屈曲するもの(208)天井部につまみが付き、端部の形状は不明のもの(212・213)、天井部につまみが付き、外反する端部との境に稜線を持つもの(218)がある。これらの調整は、天井部に回転ヘラケズリがみられ、端部及び内面に回転ナデを施すもの(196・197)、天井部にヘラ切り痕を残し、端部及び内面に回転ナデがみられるもの(198・199・206)、天井部及び端部内外面に回転ナデがみられるもの(207・208・212・213・218)がある。

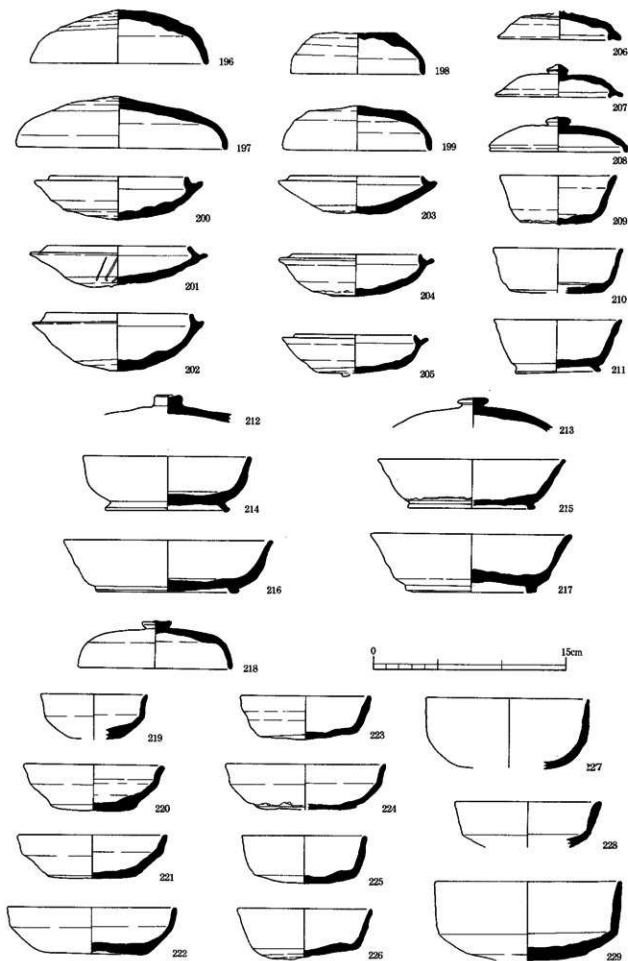
杯は、碗形で受部を持つもの(200~205)、平底の底部に外反する口縁部を持つもの(209・210)、平底の底部に高台が付き、外反する口縁部を持つもの(211・214~217)、平底の底部と外反する口縁部との間に稜線を持つもの(219~224)、ほぼ平底であるが多少歪む底部に外上方へまっすぐ伸びる口縁部を持つもの(225・226)、丸底の底部にほぼ直立する口縁部を持つもの(227)、丸底の底部と外上方へほぼ直立する口縁部との境に稜線を持つもの(228・229)がある。これらの調整は、底部外面に回転ヘラケズリがみられ、口縁部内外面及び底部内面に回転ナデを施すもの(200~202)、底部外面にヘラ切り痕を残し、口縁部内外面及び底部内面に回転ナデを施すもの(203~205・209・210・219~226)、底部外面に粗いナデを、口縁部内外面及び底部内面に回転ナデを施すもの(211・214~217)、底部及び口縁部内外面に回転ナデを施すもの(227~229)がある。

230~236は、高杯である。そのうち、230~232は、長脚の高杯である。230は杯部で、底部外面は回転ヘラケズリがみられ、口縁部内外面及び底部内面には回転ナデを施す。231は、脚柱部である。長方形の透かし穴が二段みられ、その間を凹線が2条めぐる。232は、脚裾部である。大きくひろく裾端部に面を持ち、脚柱部には長方形の透かし穴が一部残る。233~236は、低脚の高杯である。233・244は、下方へひろく脚柱部と、水平な面を持つ端部との間が外方へ張り出し、外傾する鈍い面を持つ。内外面とも回転ナデを施す。234は長方形の透かし穴がみられる。235・236は、外反する脚柱部の端部に面を持ち、内面に小さな突起がめぐる。内外面とも回転ナデを施す。

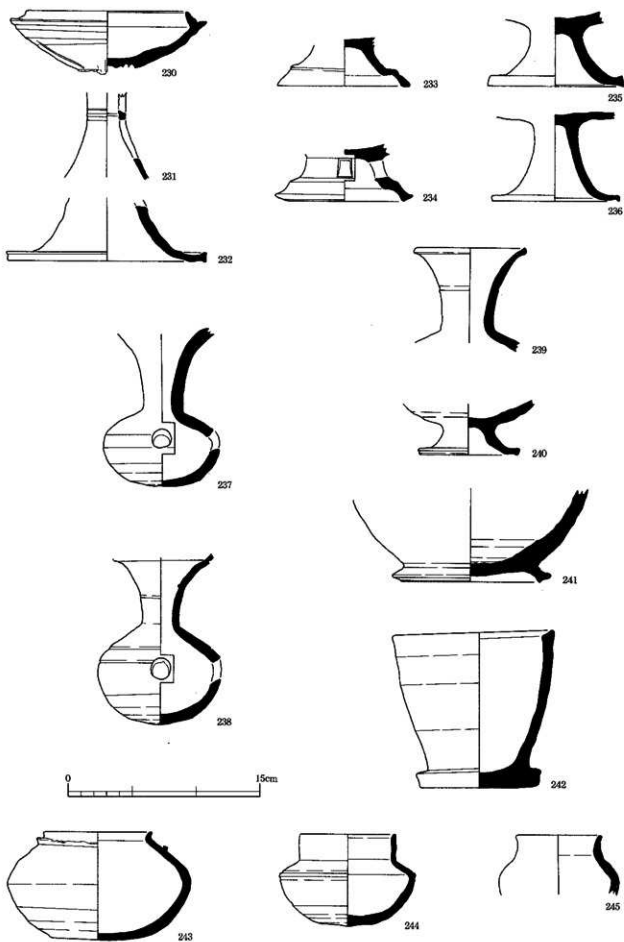
237・238は、壺である。扁平な体部で、外面下半には回転ヘラケズリがみられ、上半は回転ナデを施す。このうち238は、肩部に2条の凹線がめぐる。

239~241は、壺である。239は、口縁部で、外反する口縁端部に面を持つ。240・241は、台付壺の底部である。高台は内傾する面を持ち、端部はやや窪む。体部外面の高台付近に回転ヘラケズリがみられ、その他は回転ナデを施す。

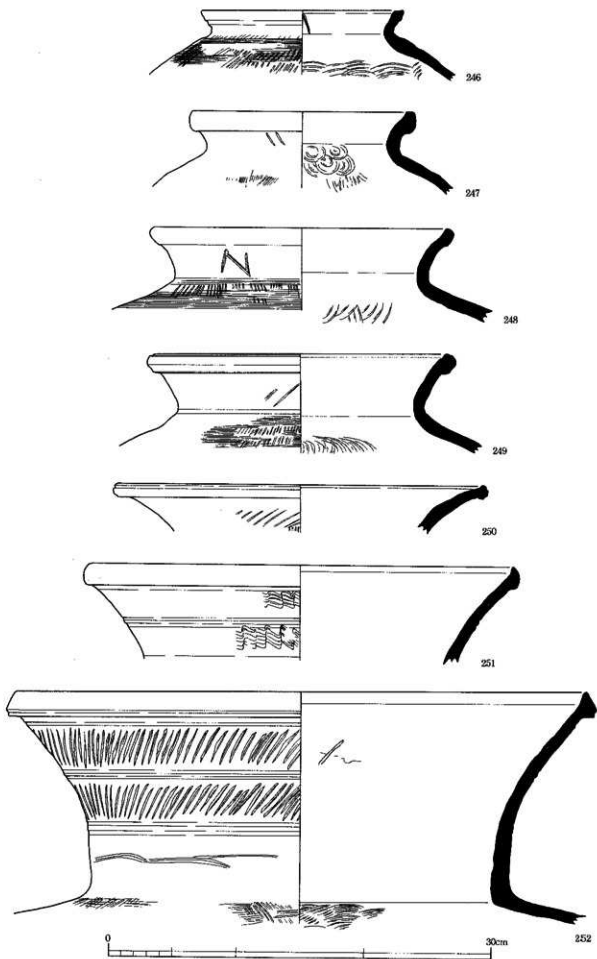
242は、鉢である。やや内湾する口縁部で端部は内傾する面を持つ。内外面とも回転ナデを施す。



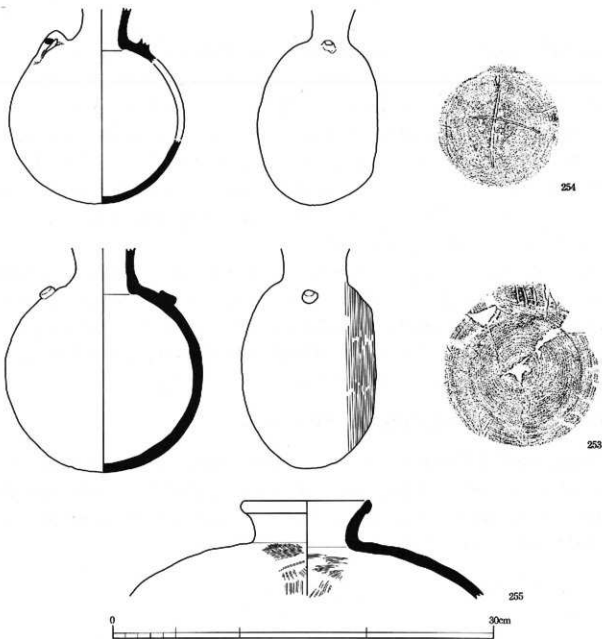
第19图 河道2下層出土土器(3)



第20圖 河道2下層出土土器(4)



第21図 河道2下層出土土器(5)



第22図 河道2下層出土土器(6)

243~245は、短頸壺である。243は、平底の底部にやや肩の張った体部で、口縁部はごく短く、口縁端部はやや外反する。内外面とも回転ナデがみられ、口縁部付近には溶着した別個体の一部がみられる。244は、丸底の底部に肩の張った体部で、その部分に稜線がみられる。口縁部が直立し、端部は内傾する鈍い面を持つ。肩部には凹線が2条めぐり、底部付近は回転ヘラケズリがみられ、体部内外面及び口縁部内外面は回転ナデを施す。245は、肩の張った体部で口縁端部がやや外反する。内外面とも回転ナデを施す。

246~252は、須恵器の甕である。246は、短く外反する口縁部で、口縁端部は内傾する鈍い面を持つ。体部外面には平行タタキの後、一部カキ目が施され、内面には同心円文が残る。

247は、外反する口縁部で口縁端部が外側に肥厚する。体部外面には平行タタキがみられ、内面には同心円文が残る。口縁部外面にヘラ記号がみられる。248は、外反する口縁部に外側にやや拡張した口縁端部で、その境に鈍い稜線を持つ。体部外面には平行タタキの後、カキ目を施し、内面には同心円文が残る。口縁部外面にはヘラ記号がみられる。249は、外反する口縁部で口縁

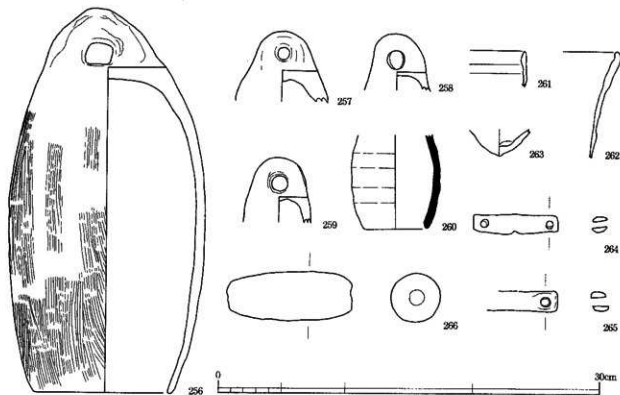
端部が外側へやや肥厚し、その上部に弱い凹線がめぐり、体部外面は平行タタキの後、カキ目を施し、内面には同心円文が残る。250は、外反する口縁部で口縁端部に丸みのある面を持ち、その上部に弱い凹線がめぐり、口縁部外面にはへら状工具によるへら描き文が一部みられる。251は、外反する口縁部で、口縁端部に外傾する鈍い面を持つ。口縁部外面には2条のへら描波状文がみられ、その間に2条の凹線がめぐり、252は、口径44.4cmと大型である。外反する口縁部で、口縁端部は外傾する面を持ち、その下部に弱い凹線状の窪みがめぐり、口縁部外面には、へら状工具によるへら描き文が二段めぐり、その上下と間に凹線をめぐらす。体部外面には平行タタキの後カキ目がみられ、内面には同心円文が残る。

253・254は、提瓶である。253は、体部側面の形状は扁平で、全面にカキ目を施す。肩部両側の吊り手は、円形の粘土塊を付し、頸部にへら記号がみられる。254は、体部背面がやや膨らみ、全面に回転ナデを施す。肩部両側の吊り手は環状のものを付し、体部にはへら記号がみられる。

255は、横瓶である。外反する口縁部で、口縁端部が外側へやや肥厚する。体部外面には平行タタキの後一部ハケ目が施され、内面には同心円文が残る。

### 第3節 河道2出土漁撈具・製塩土器 (第23図・PL.18)

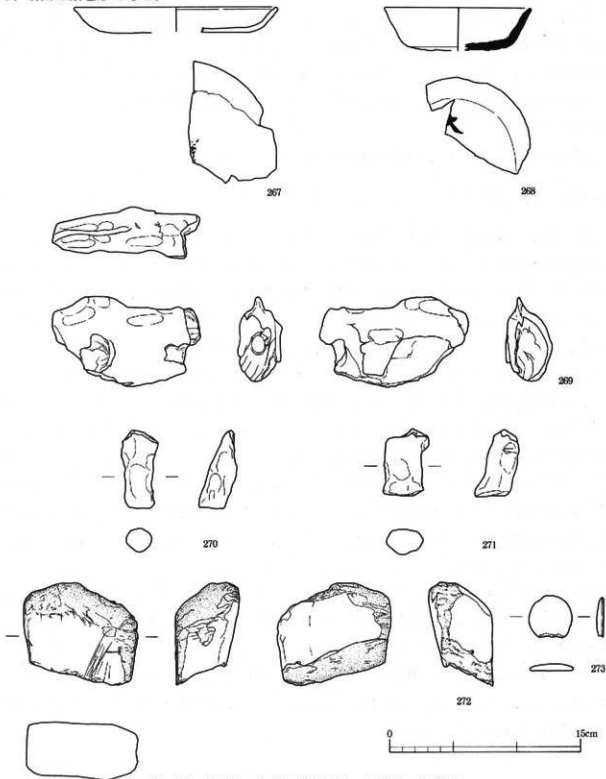
256は、土師質の釣鐘形真蛸壺である。吊り手の部分には指頭痕が残る。体部外面に縦方向のハケ目がみられ、内面はナデを施す。河道2下層より出土した。257~259は、土師質の釣鐘形飯蛸壺である。内外面ともナデを施し吊り手には指頭痕がみられる。260は須恵器の飯蛸壺である釣鐘形の口縁部で内外面ともナデを施す。



第23図 河道2出土漁撈具・製塩土器

261～263は、製塩土器である。261は、口縁部にあたり丸くおさめる口縁端部を持ち内面に鈍い稜線がみられる。胎土は荒く砂粒を多く含む。262は、口縁部である。外面は指頭痕がみられ、内面はナデを施す。口縁端部はやや内側に屈曲する。胎土は荒く砂粒を多く含む。263は、底部である。尖底で内外面に指頭痕を残す。胎土は粗く砂粒を多く含む。

264～266は、土錘である。264・265は、棒状土錘で紐穴を両端に二つ穿つ。266は、管状土錘で、断面は葉巻形である。



第24図 河道2出土墨書土器・土製品・石製品



#### 第4節 河道2 出土墨書土器・土製品・石製品 (第24図・PL.19)

267・268は、墨書土器である。267は、土師器の皿で口縁部内外面及び底部内面にはヨコナデがみられ底部外面には粗いナデを施す。底部外面に墨書がみられる。268は、須恵器の杯で底部外面にヘラ切り痕が残り口縁部内外面及び底部内面には回転ナデがみられる。底部外面に墨書がみられる。「大」であろうか。

269は、不明土製品である。手ずくねで、左右とも欠損している。棒状の芯の痕跡であろうか、欠損している側からは、穿孔がみられ、両面の下半には粘土の剝離した痕跡がみられる。土馬の体部であろうか。270・271は、土馬の脚部である。手ずくねで体部から剝離したものである。

272は、砥石である。方形で、一部欠損している。上縁は原礫面を残すが、その他の各面には使用痕が残る。

273は、不明石製品である。平面形は円形で断面は扁平である。

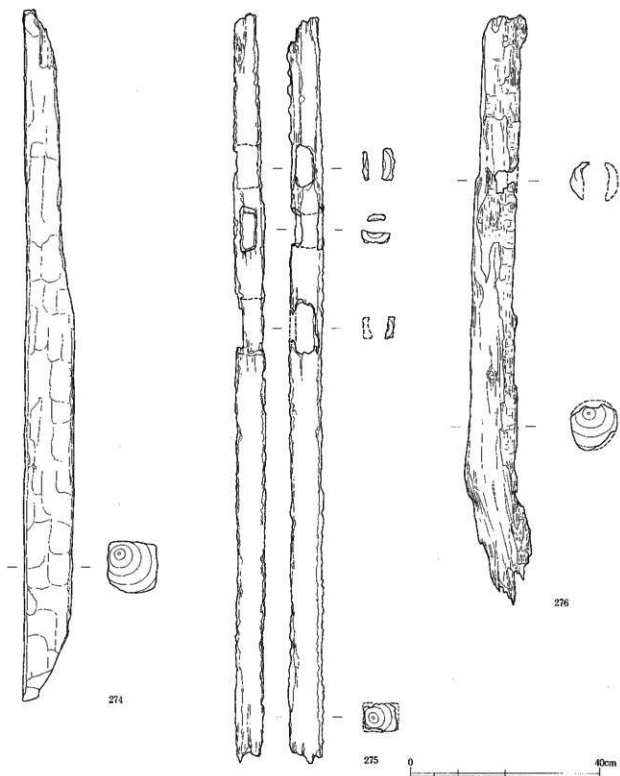
#### 第5節 河道2 出土木製品 (第25・26図・PL.20)

274～276は、建築部材である。274は、断面がほぼ正方形で両端が一部欠損しているが、いずれも端面がみられることから、長さはほぼ本来のものであると考えられる。各面とも加工痕が若干みられ、表面は一部炭化している。275は、遺存状態が悪く、表面が原形をとどめないが、断面の形状は復元すると長方形であったと考えられる。ほぞ穴が3つみられるが、それぞれの距離が短く、一度の使用というより、何度か転用されたのではと考えられる。また、両端とも欠損している。276は、木材の表面を加工せず、ほぞ穴のみが穿ってある。表面は激しく炭化している。

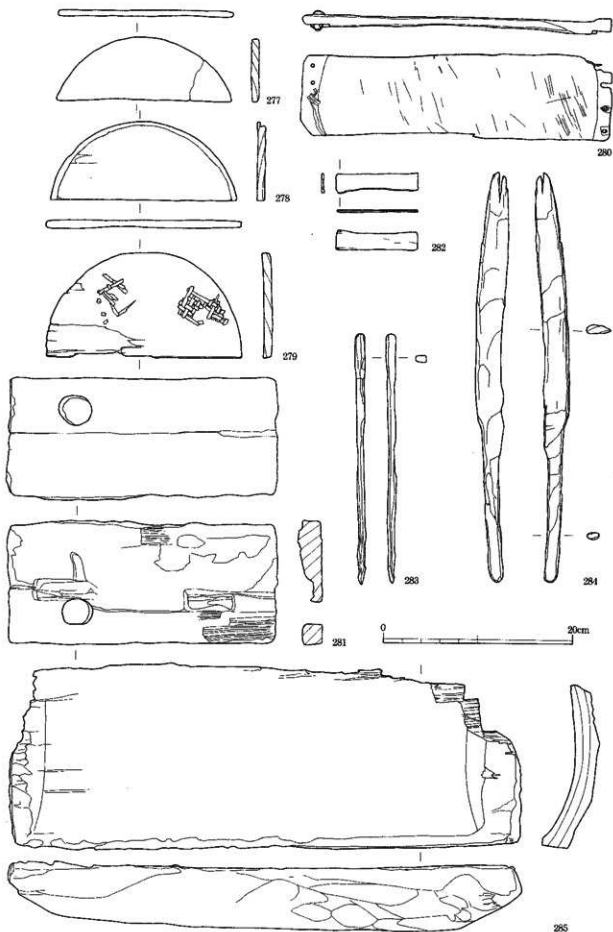
277～280は、曲物の底板である。277は、断面方形で下半部は欠損している。側面中央に穿孔が一カ所みられる。278は、側縁に低い段がめぐり、下半部が欠損している。279は、断面方形で下半部が欠損している。なお、表面に植物質の網代が付着しているが、これは欠損した底板に付着した泥の上にみられることから、別個体である可能性が高い。280は、大型の曲物の底板である。両端を欠損している。端部は一段低くなっており、その段に数個の穴が穿ってある。それらの一部には、樹皮らしき紐が残っており、このことから、おそらく樺綴じにより、側板と接合していたものと考えられる。

281は、断面方形の長方形の板材に円形の穴が一つみられ、中央付近に長方形の窪みが二つ並んでみられる。用途は不明である。282は、長方形の板である。283は、断面方形の棒で表面に加工痕がみられる。用途は不明である。

284は、断面が扁平で刀形木製品と考えられる。全体的に簡素なつくりである。285は、盤で一部欠損している。底部は平底で台が付くものではない。半円形の板材をくり貫き、内面を作り出す。内外面とも粗いつくりである。



第25図 河道2出土木製品(1)



第26図 河道2出土木製品(2)

## 第5章 まとめ

今回の調査で得た知見を以下に列記する。

1. 河道1から出土した土器群は、多少の混入が考えられるものの、おおよそ庄内式併行期の後半に位置付けられる。周辺における当該時期の遺跡は、熊取町大久保遺跡、泉佐野市湊遺跡などで、泉南地域においてあまり調査例のない時期である。今回の調査では、包含層の確認のみではあったが、調査地周辺の近接したところに集落の存在する可能性が高く、今後の調査が期待されるところである。

2. 庄内式併行期から布留式期における泉南地域は、土器製塩活動の一大生産地であった。また、古墳時代に前後する時期に、内陸における製塩土器の出上が増加し、それと前後して紀伊半島西岸での製塩土器の出上が急増していることから、生産と供給の拡大があったと考えられる。この観点から、今回の調査成果は、土器製塩活動における生産と供給の一変革期の貴重な資料と言える。

3. 河道2の出土遺物に、窯体及び焼け歪みや自然釉の付着する須恵器がみられる。また、出土した須恵器には、3mm程の砂粒を含むような粗い胎土のものもみられる。これらのことから、周囲に須恵器窯の存在が推定できる。

また、出土した土器をみると、都城における編年と若干のずれが想定されることである。河道2上層の土器群は、土師器杯B、須恵器杯H、須恵器杯Bなどの存在から、おおよそ飛鳥Ⅱ～Ⅴ<sup>①</sup>にあたりと考えられる。自然流路からの出土である為、土器編年の資料としてあまり良好なものではないが、上層土器A群などの出土状況から、混入の可能性が相当考えられるが、ある程度の一括性の可能性も捨てきれない。この混在する土器群が、単なる混入によるものか、それとも中央と地方との土器様相の相違に起因するものなのか、今後の資料増加を待ちたい。

4. 河道2出土の釣鐘形真蛸壺は、完全な形での初めての出土例である。周辺では、貝塚市加治神前品中遺跡<sup>②</sup>、脇浜遺跡<sup>③</sup>などで確認されており、現時点では泉南地域にその分布が限られるようである。漁撈具における地域性を示すものとして興味深い資料である。

5. 河道2出土の大量の遺物が示す事実は、集落の存在である。泉南市教育委員会による1977年度の調査において確認された掘立柱建物は、その一部である可能性が高い。さらに、遺物の示す時期幅から、ある一定時期集落が存在していた可能性が指摘できる。なお、遺跡の東約5Kmには海会寺が位置する。今回の調査で存在が推定される集落は、海会寺の建立時期に前後することから、海会寺とこの男里遺跡の集落との関わりが興味深い問題である。

①奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』（1978）

古代の土器研究会『古代の土器Ⅰ 都城の土器集録』（1992）

②貝塚市教育委員会『加治神前品中遺跡発掘調査概報』（1988）

③（財）大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡Ⅲ』（1991）

# 報告書抄録

ふりがな	おのさといせきはつくつちょうさがいよう・I							
書名	男里遺跡発掘調査概要・I							
副書名	府営地域総合オアシス整備事業（泉南地区・双子池）に伴う							
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	河田泰之							
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課・泉南市教育委員会							
所在地	〒540 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 ☎06(941)0351・〒390-05 泉南市樽井1-1-1 ☎0724(83)0001							
発行年月日	西暦1997年4月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
男里遺跡	泉南市男里 地内	27228		34° 21' 30"	135° 15' 40"	1996年1月8日 ～1996年3月4日	546m <sup>2</sup>	溜池堤体 改修工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
男里遺跡	集落	弥生時代終 末～古墳時 代初頭・飛 鳥時代～奈 良時代	河道	弥生土器・土師器・ 須恵器・製塩土器・ 木製品・窯体		<ul style="list-style-type: none"> <li>・窯体、焼け歪みのみられる須恵器の出土から、付近に須恵器窯の存在が推定できる。</li> <li>・庄内式併行期及び飛鳥奈良時代の土器がまとまって出土。</li> </ul>		

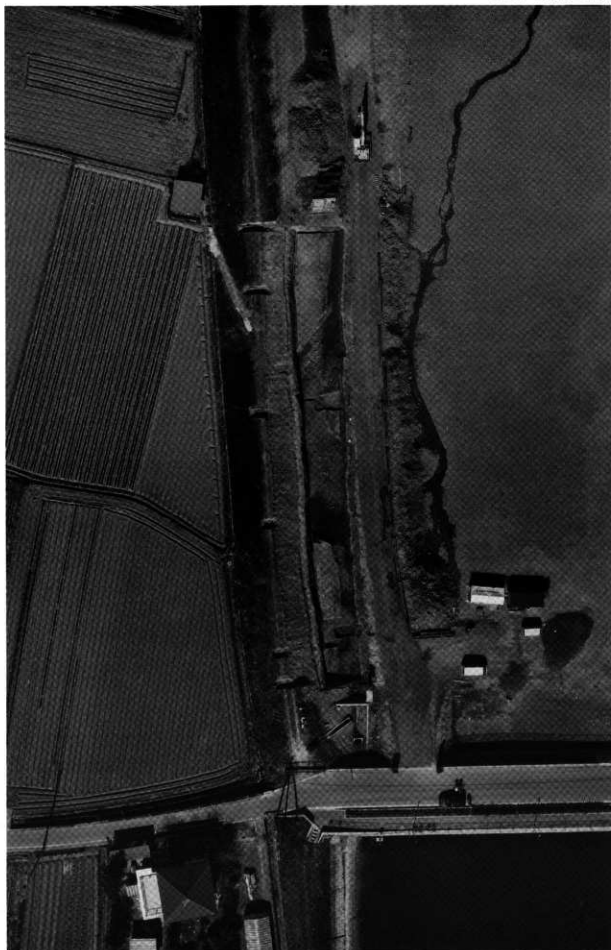
図

版



男里遺跡を南から望む

PL.1 調査区全景





全景 (北から)



調査区東側断面 (南西から)





全景 (北から)



調査区中央付近 (北東から)



調査区西壁断面 (南東から)



調査区断面C~C' (南から)



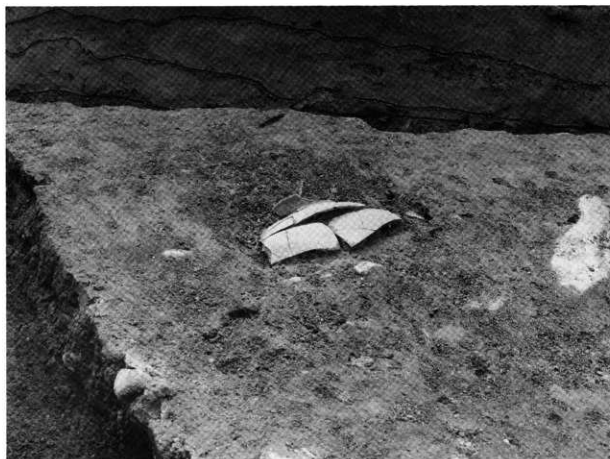
調査区断面B～B' (南東から)



上層A群土器出土状況 (北東から)



上層B群土器出土状況 (南東から)



同上



調査区断面A~A' (北から)



上層木製品出土状況 (北から)

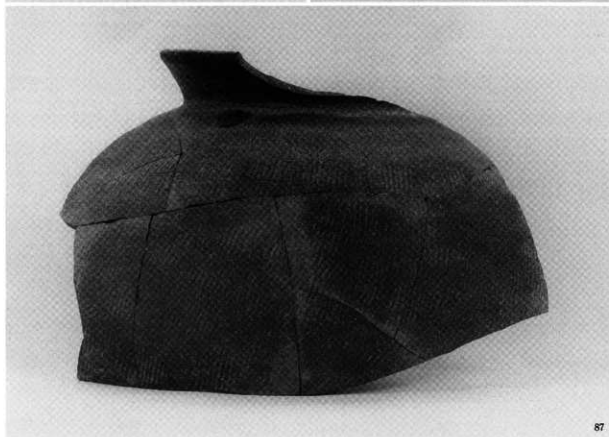
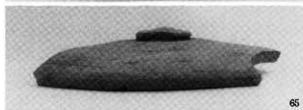


上層木製品出土状況

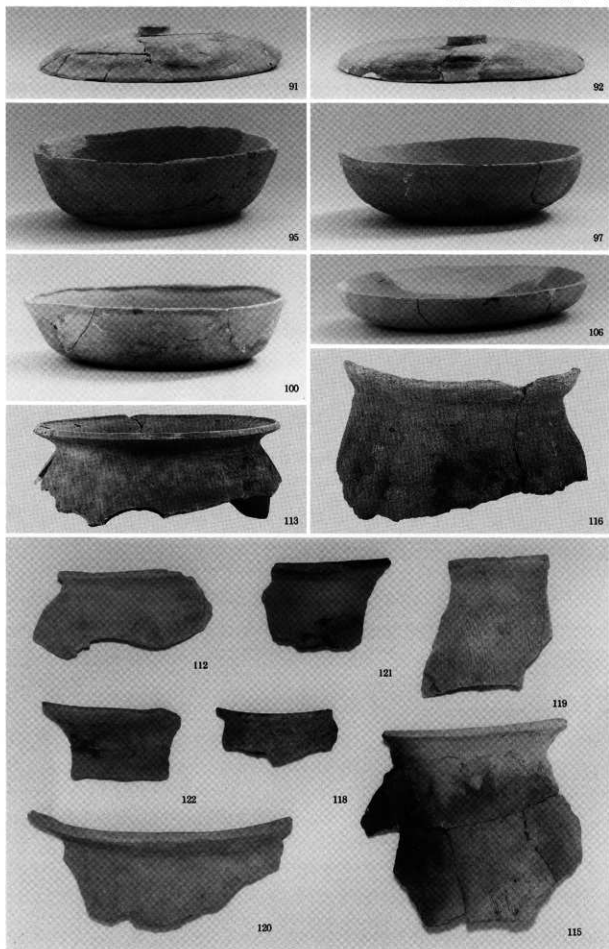


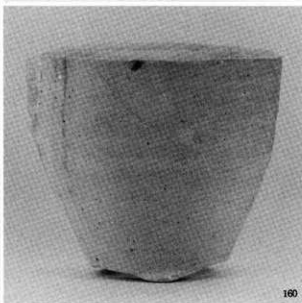
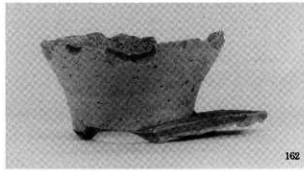
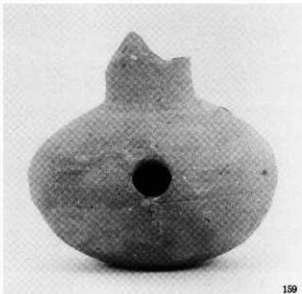
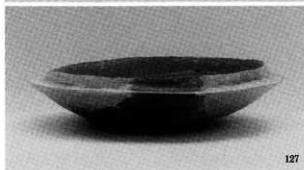
同上

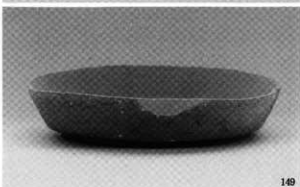
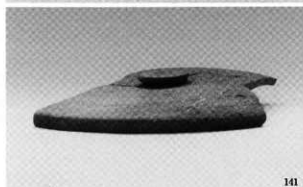
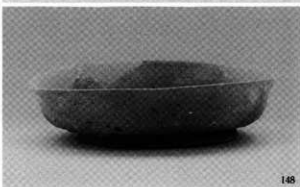
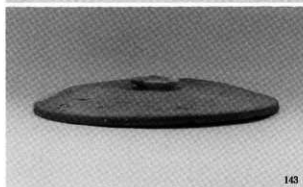
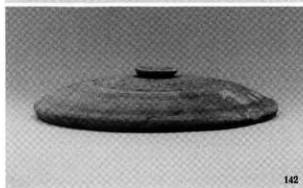
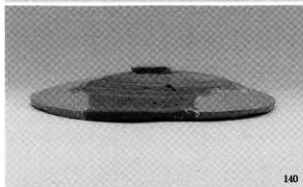
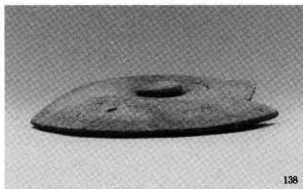


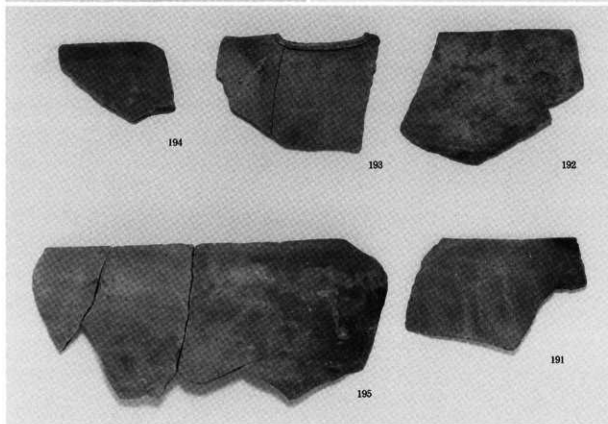
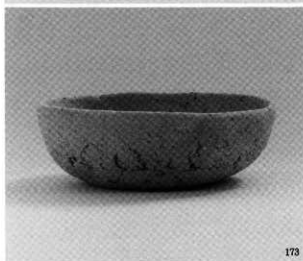
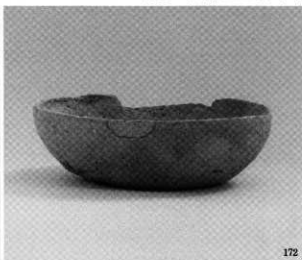
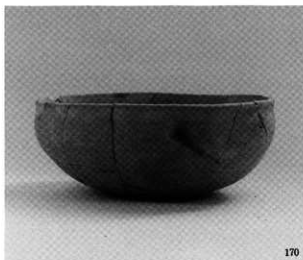


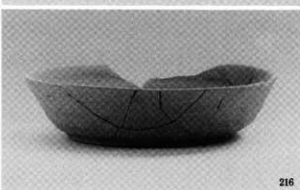
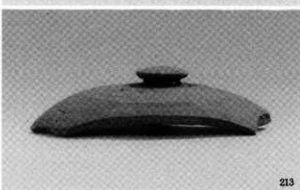
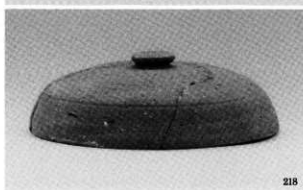
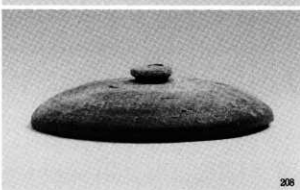
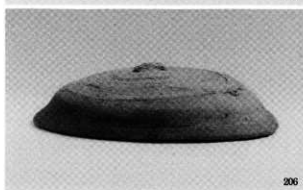
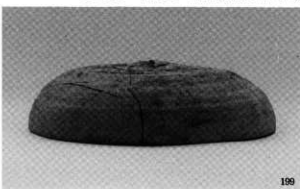














237



238



239



233



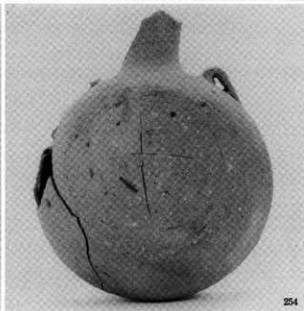
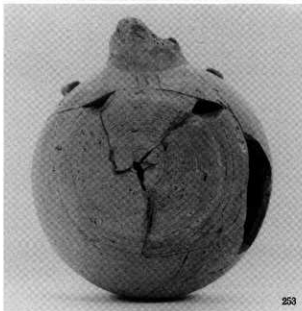
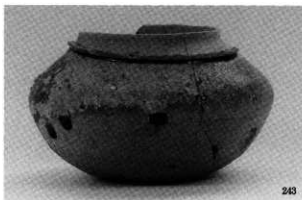
234

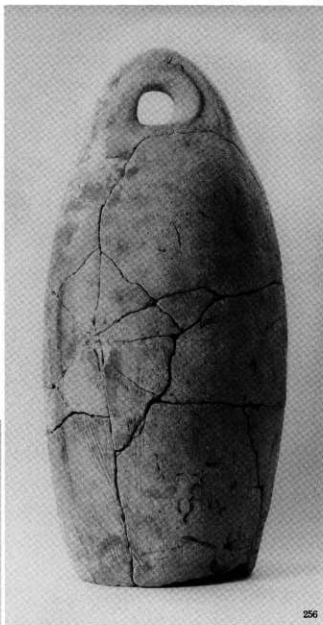


235

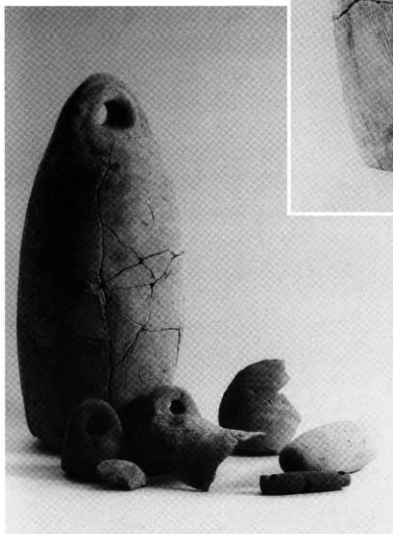


242

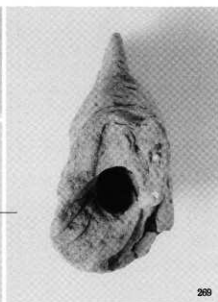
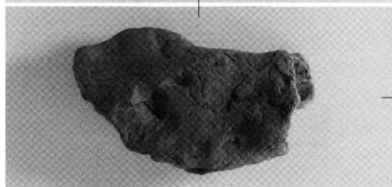
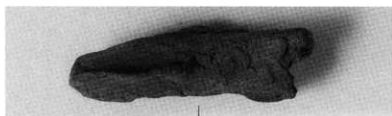
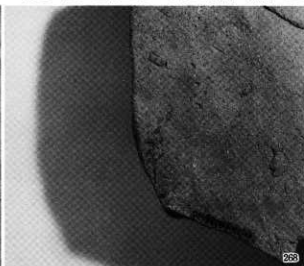


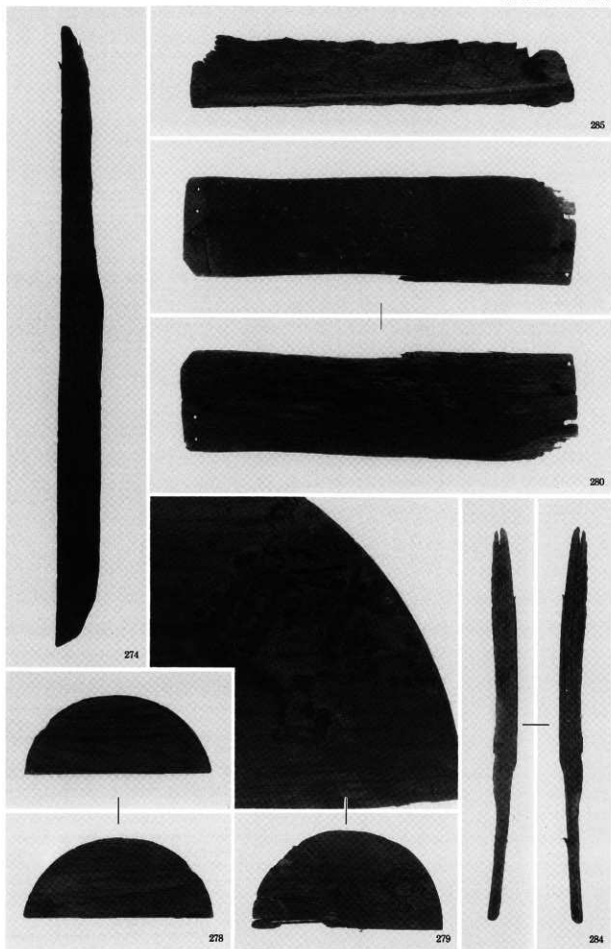


256









男里遺跡平面圖

